

『平家物語』における「寂しさ」と「哀れ」

(『「さびしさ」の研究』一)

赤羽根 龍 夫

テーマ 『平家物語』の「哀れ」の底に中世的美意識である「さびしさ」

は見えてくるであろうか。

一

『平家物語』は「無常感の文学」あるいは「哀れの文学」といわれている。しかし無常感とは、平安時代末の院政期、ようやく黄昏を迎えつつある当時の貴族の感慨であって、新興武士勢力であった平家一門の人々は新しい時代を切り開いていくエネルギーに溢れており、衰退期を迎えた当時の貴族には到底真似の出来ない、王朝文化華やかかなりし頃の上流貴族のような生活を送り、無常感などいささかも感じていなかったであろう。『平家物語』⁽¹⁾は次のように記す。

平家の邸宅には華美な服装の人々がいっぱい集まって、御殿の上は花のように美しい。門前には車馬がたくさん集まって、市をなす繁栄ぶりである。楊州の金、荊州の珠、呉郡の綾、蜀江の錦などありとあらゆる珍しい財宝が集まり、何一つ欠けているものはない。歌舞をする御殿の基をなすものや魚竜爵馬(中国の曲芸)の遊芸・遊びなど、あらゆるものがあつめられていて、おそらくは内裏も院の御所も、これ以上ではあるまいと思われた。(巻第一 吾身栄花)

特に後白河法皇の五十歳の賀の際の平維盛が舞う姿は参会者に多くの感銘を与え、藤原隆房の『安元御賀記』や『玉葉』『吉記』などの貴族の日記などにその様子が記録されている。高倉天皇の中宮となった清盛の娘・徳子(建礼門院)に仕えた右京大夫は次のように書いている。

平家の公達のどの方も、今の世の人々を見聞きするにつけ、まったくすぐれていたなどと思い出されるご一族であるが、この維盛の中將は際立って類まれな、ご立派な容姿と心遣いといったら、本当に昔今を通じて、例もなかったよ。であるから、何かの機会に、賞賛しない人があったであろうか。法住寺殿で行われた後白河法皇の五十の御賀で、青海波を舞った時などは、「光源氏の例も思い出される」などと、人々は言ったことであつた。「まったく、花の美しい色つやも圧倒されてしまいそうだ」などという噂であつたよ。

一方、『平家物語』は都落ちの平家一門の運命に対して惜しみなく「哀れ」という言葉を投げかけているが、それは平家が滅びた後の視点で都落ち以降の平家の運命を見ている作者の感慨であって、平家一門は壇ノ浦で滅びる直前まで自らが都へ帰る可能性を信じていたのであり、したがって「哀れ」という感慨を強くもつていたわけではない。

「哀れ」の用語例は『覚一本平家物語』、『延慶本平家物語』共に百数十例あり、そのうち「おしはかられて哀れなり」「かくやと覚えて哀れなり」といった、作者が表面に出ている表現も多くある。『覚一本』で「哀れ」で終わっている章は以下の通りである。

「祇王」

四人一所にこもりゐて、あさゆふ仏前に花香をそなへ、余念なくねがひければ、遅速こそありけれ、四人のあまども、皆往生の素懷をとげけるとぞ聞えし。されば後白河の法皇の長講堂の過去帳にも、「祇王・祇女・仏・とちらが尊霊」と、四人一所に入れられけり。あはれなりし事どもなり。(巻第二)

「二代后」

その間の御なからへ(近衛天皇と多子との間柄)、言ひ知らず哀にやさしかりし御事なり。(巻第一)

「大納言流罪」

島のならひ、うしろは山、前は海、磯の松風浪の音、いづれも哀は尽きせず。(巻第二)

「卒塔婆流」

入道(清盛)も石木ならねば、さすがに哀げにぞの給ひける。(巻第二)

「二」

「河原合戦」

(義仲は)去年信濃を出しには五万余騎と聞えしに、けふ四の宮河原を過ぐるには、主従七騎になりにけり。まして中有(死後の四九日)の旅の空、おもひやられて哀也。(巻第九)

「敦盛最後」

(敦盛の死が)遂に讃仏乗の因(悟りに導く機縁)となるこそ哀なれ。

(巻第九)

「内裏女房」

されば中将、南都へわたされてきられ給ぬと聞えしかば、(内裏女房は)やがてさまをかへ、こき墨染にやつれはて、かの後世菩提をとぶらはれけるこそ哀なれ。(巻第十)

「重衡斬れ」

(重衡の)頸もむくろも煙になし、骨をば高野へおくり、墓をば日野にぞせられける。北方もさまをかへ、かの後世菩提をとぶらはれけるこそ哀なれ。(巻第十二)

「判官都落」

去二日には義経が申うくる旨にまかせて、頼朝をそむくべきよし、庁の御下文をなされ、同八日は頼朝卿の申状によつて、義経追討の院宣を下さる。朝にかわり夕に変ずる世間の不定こそ哀なれ。(巻第十二)

また章の最後ではないが「おしはかられて哀なり」で印象的な場面を二例挙げてみよう。

「一門都落」

まことに古郷をば一片の煙塵と隔てつつ、前途万里の雲路におもむかれけん人々の心のうち、おしはかられて哀也。(巻第七)

「逆櫓」

新中納言知盛卿の給ひけるは、「東国・北国の物共も、随分重恩をかうむったりしかども、恩をわすれ、契を変じて(主従の約束にそむいて)、頼朝、義仲等にしたがひき。まして西国とても、さこそはあらんずらめ(きつとそうなるにちがいない)」と思ひしかば、都にていかにもな

らん（討死をとげよう）と思ひし物を。わが身ひとつの事ならねば、心よわうあくがれ出て、けふ（今日）はかかるうき目を見る口惜さよ」とぞの給ひける。誠にことわりとおぼえて哀なり。（巻第十一）

このように『平家物語』では聴衆や読者に「哀れ」という感情を押し付け、物語の全体が「哀れ」一色で染め上げられているが、それは平家一門の運命を見ている作者の感慨であって、平家の人々の感慨ではない。それでは運命の激変に出会っている平家一門の人びとの感情・気分は何だったのであろうか。『平家物語』を哲学する⁽³⁾で私は、都落ちの過程で平家一門が抱かざるを得なくなった「認識」について問題とした。

木曾義仲は平家の軍勢を倶利伽羅峠、篠原合戦で壊滅させ、勢いに乗じて都を眼下に見下ろす比叡山に攻め上った。「差し迫った今」によって都落ちをせざるを得なくなった平家は福原から太宰府に逃れ、一時は勢力を盛り返し都近くまで迫ったが、ふたたび義経によって一ノ谷から八島へと追いつれとされ、壇ノ浦まで追い詰められた。かくして壇ノ浦合戦で「今」がどうしようもなく「死」と結びついたとき、知盛において「今を生きる」という認識が生まれた。知盛自身が都落ちの過程で宗盛にかわって一門の運命を担うという重責を引き受けることで、人間の運命への認識を深めていっただけでなく、『平家物語』の作者自身が、清盛の悪行ゆえに平家はやがて滅亡せざるを得ないという重盛の運命観から、過去から自由になつて与えられた今を生きるという知盛の運命観へ成長していった。「見るべきほどのことは見つ。今は自害せん」という知盛の最後の言葉は、中世的認識の萌芽を示すものであった。この認識はやがて親鸞や道元の「只今」救われているという確信を生きる、さらには茶道の「一期一会」や兼好の「世はさだめなきこそ、いみじけれ」（人生は無常だからこそ生きるに値する）

という認識へと深まっていく。

今回は『平家物語』の「認識」ではなく「感情」「気分」を問題とした。理性的認識ではなく気分こそが人間存在の真実を明らかにすると主張したのはハイデッガーの『存在と時間』である。ハイデッガーは人間存在の最も根源的な気分を「不安」であるとし、「不安」の実存論的分析を通して人間を「死に臨む存在」と捉え、さらには人間存在の意味は「時間性」であるという事を明らかにしたのである。（『ハイデッガーと日本の隠者哲学』⁽⁴⁾ 参照）

日本においてはもともと公用語や学術語として使われた漢文ではなく、大和言葉を使った表現である和歌が、日本人の感情や気分を表現していることは、最初の勅撰集である『古今集』⁽⁵⁾の「真名序」によっても明らかである。

我が「和歌」と呼ぶものは、その根を心という大地にしっかりと下ろし、ことばという森林に咲き出た一種の花なのである。人として世にある以上、何もせぬ状態にあるというのは考えられぬことである。思考は絶えず変転し、哀感はいかにいれかわる。心に感動が起こると、歌となつてことばに表れるのである。このゆえに、安らぎをえた者の声は楽しみに満たされ、怨みをもつものの歌には悲しみがこもっている（逸せる者は其の声楽しみ、怨ぜる者は其の吟悲しむ）。だから、歌によってわが思いを述べ、わが憤りを示すことが可能となるのである。天地の神々を動かし、死後の靈魂を感激させ、人道を改良し、夫婦の和をもたらすこと、これらの機能が和歌よりまさるものはないのである。

勅撰和歌集は二十一代集まで存在するが、九〇五年の『古今和歌集』か

ら一二〇五年成立の『新古今和歌集』にいたる八代集が日本人の感受性に及ぼした影響は計り知れない。後で言及するように忠度は都落ちに際して勅撰集である『千載和歌集』に入選することに執着した。『平家物語』において都落ちの過程で詠んだ和歌の中にこそ平家一門の感情・気分がこめられているのではないかという推測を立てるのも、そうした事情によるのである。

『平家物語』は平家の怨霊鎮魂のために書かれており、したがって冒頭から「諸行無常」「盛者必衰の理」の枠を物語にはめ込んでいる。さらには編集の過程で収集した資料は平家の滅亡を題材にして書かれた唱導説話が多く集められており、それが『平家物語』を仏教文学としてしまっている。したがって『平家物語』は最初から平家一門の滅亡がテーマであって、義経や義仲など平家以外の武将は別として『源氏物語』のように個々の登場人物の性格や個性については関心が薄い。そのため『平家物語』は真に平家の人々の物語となり得ていない。この小論においては都落ちの過程で歌われた和歌を題材として真に平家の物語りに近づきたいのである。

二

平安時代の美意識は「もののあはれ」であるといわれている。それに対して中世的美意識は「さびしさ」であるということができるであろう。

周知のごとく「あはれ」は王朝美に基調を示す概念であり、「さびしさ」は中世的美意識の核心をなす概念とされている（目崎徳衛『西行の思想的⁽⁶⁾研究』）

それならば古代から中世の時代の転換期に位置する源平の動乱の主役であった平家一門に「哀れ」から「寂びしさ」への美意識の転換が生じていないであろうか。平家一門が没落の過程で抱かざるを得なくなった感情を

知るための「作業仮説」として「寂しさ」ということに注目したい。

「さびしさ」は中世を通して美的理念としての「さび」に昇華されていくことになるが「さび」を「積極的な価値を付与して批評の言葉として最初に用いた」のは藤原俊成であると言われている。一一七〇年の「住吉杜歌合」の平経盛のうたの標語に「さび」を用いている。平経盛は清盛の異母弟である。

住吉の松吹く風の音の絶えて浦さびしくも澄める月かな

（住吉杜の松に吹く風の音が絶えて、杜前の住吉の浦に澄んだ月が寂しく差していることよ）

この歌に対して俊成は「すがた、言葉いひしりて、さびてこそ見え侍れ」と賛辞を送っている。またこのときの歌合での前大納言実定の「うちしぐれ物さびしかる蘆のやのこやの寝覚に都こひしも」の歌を「姿すでに幽玄の境に入る」と高く評価している。俊成の美的理念である「幽玄」とは、「優美さと寂しさを感性の深みで統一した余情美」（私見）といえるが、この住吉杜歌合の頃から明確な形を取るようになったと思われる。俊成はこの時はこの歌一首に対してだけ「さび」を使っているが、一一七二年の「広田杜歌合」、一一七九年「右大将歌合」と、その後の批評でしばしば使うようになる。

そうすると「さび」に積極的意味が見出されたのは平経盛の歌であることになる。「寂びの美の発見者」は藤原俊成であり、その元となった歌は平経盛の歌であるといえなくもない。それでは経盛自身は「さびしい」という感情に積極的な価値を見出しているのであろうか。

住吉杜歌合が行われた一一七〇年という年は清盛の嫡子・重盛の二男の資盛が摂政・藤原基房に乱暴を働いた事件が起きた年であり、貴族の頂点にいた摂政に対する乱暴狼藉を『平家物語』は「平家の悪行の始め」と呼

んでいる。次の年の一一七一年には清盛の娘の徳子が入内してますます清盛の権力が高まって行き、平家一門の感情はおよそ「寂しさ」とは遠かったはずである。

ただ一一七〇年には清盛の弟の経盛は四十七歳で、従三位・非参議であり、一方清盛の嫡子・重盛は三十四歳で正二位・権大納言であり、平家一門における地位の差は歴然としており、経盛は傍系ゆえの寂しさを感じていたと云えなくもなく、さらには経盛は母方の身分が低いため弟の教盛、頼盛とくらべても公卿になる時期が遅れている。そんなところからも平家一門では日の当たらない場所に甘んじなければならなく、勅撰歌人でもあった父忠盛の影響のもとに和歌に慰めを見出していたのかもしれない。

平家の繁栄のもとを築いた平忠盛は武人であると同時に歌人でもあった。平家物語は冒頭で諸行無常、盛者必衰を語った後、鳥羽上皇により昇殿を許された忠盛にたいする貴族達の嫌がらせを胆力と知略で退けた「殿上の鬭打ち」から始まり、次の「鱸」では忠盛が武勇だけでなく和歌にも優れていたとして、次の挿話を載せている。

忠盛の子は諸衛の佐になった（清盛・左兵衛佐、頼盛・右兵衛佐、忠度・左兵衛佐）。そして昇殿したが、もう殿上の交際を人が嫌う事はなかった。その頃、（忠盛は）備前国（岡山県）から上京したが、その際鳥羽院が「明石の浦はどうだった」とお尋ねになったので、忠盛は、
有明の月も明石のうら風に波ばかりこそ寄るとみえしか

（明石の浦では、明けがたの残月も明るく光を放って白昼のようで、海岸を吹き渡る風だけが寄ると見えた）

と申したところ、院が御感心になった。この歌は金葉集に入れられた。忠盛はまた、院の御所に最愛の女房がいて、通って行かれたが、ある時その女房の部屋に、端に月を描いた扇を、忘れて帰られたので、側

にいた女房たちが、「これはどこからの月でしょう、出所がわからなくて気がかりですよ」などといって、笑い合っておられた。そこでその女房は、

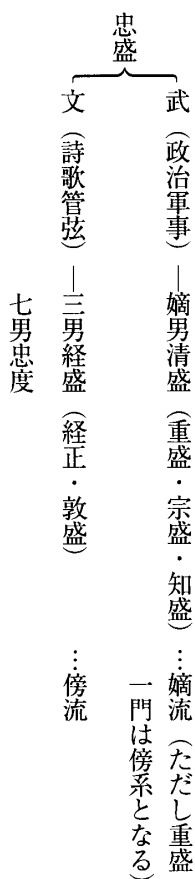
雲井よりただもりきたる月なればおぼるげにては言はじとぞ思ふ

（雲間からただ漏れてきた（忠盛来る）月だから、いいかげんなことでは、その出所を言うまいと思う）

と詠んだので、忠盛は、今までよりもいつそう深く愛された。薩摩守忠度の母はこの女房である。似ている者を友とするとかいうような趣で、忠盛が風流であつたので、その女房も優雅であつた（優なりけり）。

（巻第二）

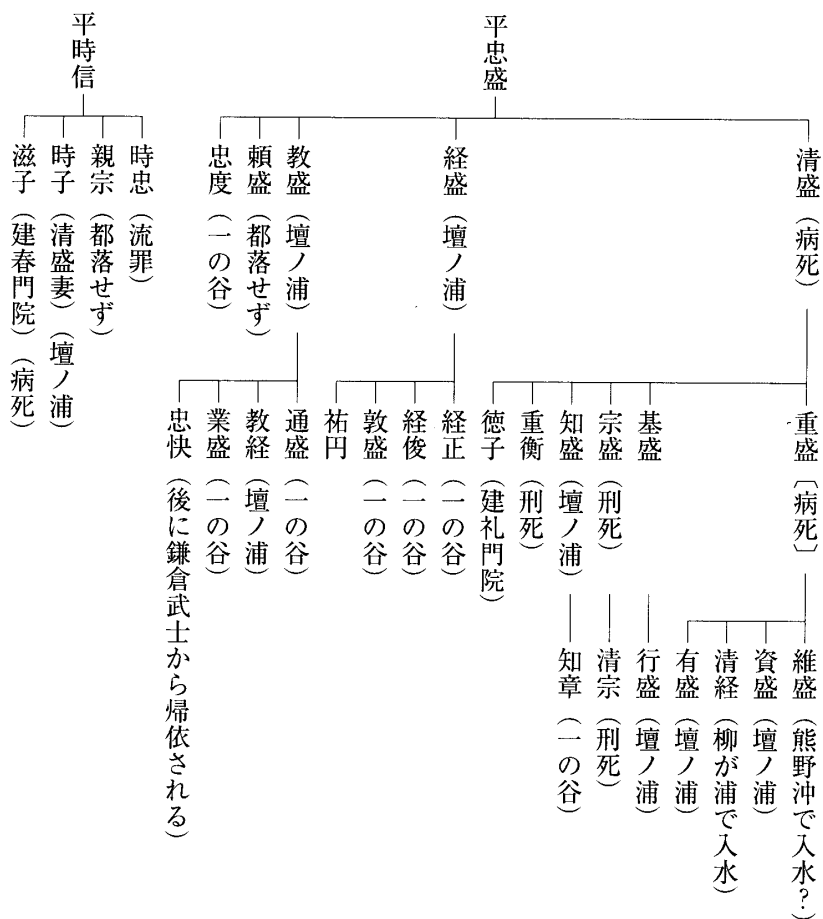
忠盛の「私家集」によれば明石の月がどうかと尋ねたのは鳥羽院ではなく殿上人であつたようであるが、「覚一本」は忠盛と鳥羽院の関係を強調するために鳥羽院が尋ねたと書き換えている。しかし文武両道の忠盛ではあつたが、嫡男の清盛は武と知略の面だけを継ぎ、文の面は三男・経盛と七男・忠度に受け継がれたようである。



しかしこれは単に才能が分かれたというより、政治の表舞台に立ったのは嫡男・清盛とその直系の子どもたちであつて、忠盛の他の子どもたちとその系列は傍系に甘んじたことにより政治的な活躍の場は限られており、

経盛・経正親子や忠度、行盛は「自覺的に（父・忠盛の）歌人としての資質を受け継ごうとした」（久保田⁸）と言えるかもしれない。

ここで忠盛の子供たちの系譜を簡単に示しておきたい。（カッコ内は主に死去した場所である）



この表を見ると平家一門のほとんどが一ノ谷と壇ノ浦で死んでおり、しかも熊谷次郎直実に首を討たれた敦盛は十七歳であり、知章、有盛、業盛も二十歳前の若者であることをみれば『平家物語』の作者が「哀れ」という感慨を投げかけるのも理解できなくはない。

さて武門平家の最初の歌人となった忠盛が和歌を詠んだのは、最初は貴族の仲間入りするためであったであろうが、単なる教養の域を越えた優れた才能を示し、「金葉集」（一一二七年）を初出として以降の勅撰集に十七首撰入し、勅撰歌人として名を挙げている。その中で忠盛の歌の特徴である叙情性に富んだ歌を『金葉集』と『詞花集』から一首ずつ挙げてみよう。

ゆく人をまねくか野辺の花薄こよひもここに旅寝せよとや

（通って行く人を招き寄せているのか、野辺の花薄よ、今夜もここに旅寝をせよというのか）

長居すな都の花も咲きぬらん我もなにゆへいそぐ綱手（船出？）ぞ

（長居してはいけません。都の花ももう咲いてしまっているでしょう。他でもない、私もその花ゆえに急ぐ舟路なのですよ）

平家が滅んだ後の勅撰集『千載集』『新古今集』にも一首ずつ撰ばれている。

一かたになびく藻塩の煙かなつれなき人のかからましかば

（一方に靡く藻塩焼く煙であることよ、冷淡な恋人がもしこのようであつたらよいのだがなあ）

すだきけん昔の人は影耐えて宿もるものは有明の月

（たくさん集まったであろう昔の人は、まったく姿をとどめないで、荒れた寺を、漏れて、守っているものは、有明の月ばかりであることだ）

谷山茂「平家歌人」⁹は、忠盛の次の歌などを引用し、忠盛における心情語、特に「かなし」「わびし」「うれし」などの主観的詠嘆度の濃厚な心情語の多用に注目し、忠盛の歌は「和歌史における『千載集』『新古今集』などの叙情性復権の動向に率先している」（『平家歌人』『和歌文学の世界』第一集）という。

天の原なきたる夜半の月みればことごとくものぞ悲しき

栢の葉の音きく時ぞ山里はいとど寝ざめもわびしかりけり

山里は跡なき庭の雪みてぞ人の訪はぬもうれしかりける

また忠盛の歌の特徴として「三句切」「体言止」「心情語の使用」「歌枕が多い」の四つを挙げ、それらは子供や孫にあたる経盛、忠度、経正に受け継がれているという。

平家の歌人たちの歌が叙情性に富み心情語が多いということは、何を詠うかより、いかに詠うかを重視した当時の歌壇の傾向であった古今集の歌風に収まりきれない、新興階級としての自己表現を求めていたということではないだろうか。平家歌人のそうした傾向は、時代の転換期における平家一門の感情・気分を知りたいというこの小論のためにも貴重な材料を提出してくれるに違いない。

三

ここで「さびしい」という感情・気分が日本の古典文学の原点ともいえる『万葉集』から、平家歌人が活躍した平安末期の院政期まで、どのような意味の変遷をたどったか見てみたい。『万葉集』の「さびし」を含んだ歌を何首か挙げてみよう。

楽浪の志賀津の児らが罷り道の川瀬を見ればさぶしも

(楽浪の志賀津の菜女がみまかつて行った道の川瀬の道を見ると淋しい)

今よりは城山の道はさぶしけむ我が通はむと思ひしものを

(あなたが上京してしまったので、今からは城山の道も寂しく思われることだろう、わたしがいつもそこを浮き浮き通つていこうと思つていたのに)

家に行きていかに我がせむ枕づくつま屋さぶしく思ほゆべしも

(家に帰ってどうしたらよいか〈枕づく〉つま屋が寂しく思われるに違いない)

古に妹と我が見しぬばたまの黒牛濁を見ればさぶしも

(その昔、妻とわたしが見た〈むばたまの〉黒牛濁を見ると淋しくなる)

秋萩を散り過ぎぬべみ手折り持ち見れどもさぶし君にしあらねば

(秋萩を、散つてしまひそうなので折り持ってみたけれどやはり淋しい、君ではないので)

愛しと思ふ我妹を夢に見て起きて探るになきがさぶしき

(かわいと思うあの娘を夢に見て覚めて捜しても居ないこの寂しさ)

我が背子が国へましましなばほととぎす鳴かむ五月はさぶしけむかも

(あなたが都へ出かけられたらホトトギスの鳴く五月にはそれでも淋しいことだろう)

桜花今ぞ盛りと人は言へど我はさぶしも君としあらねば

(桜花は今満開だと人は申しますが、私は淋しくなりません、あなたと一緒にでないので)

斎藤茂吉はこれらの歌の何首かを引用して『「さびし」の伝統』⁽¹⁰⁾で、万葉集の「さぶし(さびし)」について次のように云う。

(万葉集では)その多くは、有るべき物の無い、共にあるべきもののない、一たびゐた者が去つた、従つて独のみ居るといふ、充実せられぬ、空虚感から来る、一種独特なしみじみとした不快を伴う消極的感情をあらわすのに、サブシといふ語を用ゐてゐるやうである。それであるから、サブシちう感情は、いかにも身体(肉体)に即して居り、覚官的であり、常に、対者を予想し、対者の肉体をも予想しているように思へる。従つて、万葉集のサブシは、覚官的にして切実である。

(87)

さらに古今集、後撰集、拾遺集、金葉集、詞花集にはサブシの用例は少なく、「大体自然の風光とか、草木とかの有様について、『さびし』の語を使つてゐるが、その背景には、人の死んだこととか、孤独であることとか、

さういふ人間的な要素が未だ残っている」(90) という。

千載集、新古今集になると「さびし」の用例が増加し、その意味も万葉集とは違っているとして次のように云う。

心的・抽象的になり、天然的になり情調的に縹渺として来てゐるから、万葉時代の肉体的に切実なものとは違っている(92)

天然の寂寥相に没入して行つた 新古今時代(97)

そしてその変化の原因について「それに働き掛けた要素は外国文学(漢文学)と仏教平安朝の生活と平安末期から鎌倉へかけての戦争などであらう」としている。つまり「さびし」の変化に漢文学の寂寥感や仏教の無常感以外に源平の動乱も影響を与えていると言っている。

茂吉の『さびし』の伝統は数頁のエッセイなので源平の動乱がいかなる影響を与えたかについては論じず、「此等の変化の跡と環境との関係は、思想の豊かな人々が、私の提供したこのテーマを精細に整理して呉れるといい」(93)と言っている。

私のこの小論においては源平の動乱が「さびし」の深化にどう関わっているかということ論じる前に、平家の公達が、源平の動乱の過程、特に都落の過程でいかなる感情・気分を抱いたかということを最初に問題としたい。そこで次に平家の歌人たちが源平の動乱の前に「寂しい」という感情にいかなる意味を見ていたのかをみてみたい。

平家一門の全盛期、経盛、忠度、経正は貴族の歌合にたびたび出詠し、自らも歌会を開催している。忠度、資盛は一一八三年に歌合をしている。また忠盛、経盛、忠度、経正、親宗の「私歌集」が現存している。これらの平家歌人たちが栄耀栄華のなかで詠った歌の中にも「さびしい」という用語を使った歌がある。

山里はいつもさぞとは思へども雪のあしたはなほぞ寂しき 忠盛

住吉の松吹く風の音冴えてうら寂しくも澄める月かな 経盛

うちそよぐ水の群蘆しおたれて空に寂しく雪降りにけり 忠度

うぐいすはおのが寝ぐらの竹よりも寂しき友と君を知らなん 経正

これらの歌では「さびしさ」が「つらい」「かなしい」などの否定的な感情では捉えられていない。しかし「さびしさ」に対して積極的・自覚的になっているわけでもない。結局一一七〇年の経正の歌において「さびし」が自覚的に使われているとはいえない。俊成は経正の歌において「さび」を発見したのではなく、あらかじめ発見していた「さび」で経正のうたを批評したのであろう。

それでは一一七〇年に俊成が「さび」を積極的な意味で使ったのは何によるであろうか。

俊成が確立した美意識は「幽玄」であるといわれている。幽玄とは優艶と寂しさを含んだ余情美といえる。「平安貴族の斜陽期に生まれた」(谷山)俊成が手本としたのは「古今集」と「源氏物語」である。

『古来風体抄』で俊成は「歌の本体にはただ古今集を仰ぎ信すべき事なり」という。「古今集」はもともと主知的傾向が強いが、俊成は主情的な面を評価している。その際、彼にとつての「古今集」の代表歌は在原業平と紀貫之の次の二首である。

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身一つはもとの身にして 業平

(月よ、お前は去年の月と違うのか。春よ、お前は去年の春ではないのかね。かくいう私の体はたしかにもとのままの体なのだが)

むすぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人にわかれぬるかな 貫之

(山の井の水は、掬い上げる掌からこぼれる雫ですぐに濁って、物足りない。その清水のあかのように、私は飽かずしてあなたにお別れということになりました)

この二首の歌を俊成は後に、

歌は・・・ただよみもあげ、うちもながめたるに、艶にもをかしくも聞ゆるすがたのあるなるべし。たとえば在五中将業平朝臣の「月やあらぬ」といひ、紀氏の貫之「しづくに濁る山の井の」などいへるようによむべきなるべし。〔民部卿家歌合〕

と言ひ、さらに二首の物語的な情緒と優美な面を高く評価している。一方、『古今集』にも『源氏物語』にも「さびしい」という表現がなくはない。それらは俊成の「さび」に何らかの影響を与えているであろうか。そこで『古今集』における「さびし」を見てみよう。

『古今集』の「さびし」の用例は次の三例である。

冬の歌とてよめる

源宗于朝臣

315 山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思えば

（こうして山里に住んでみると、寂しさが一段と感じられるのはやはり冬であったよ。今までは多少でも見られた人目も離（かれ）、生命をもった草もおのずと枯れゆくのだと思うと

河原左大臣源融が亡くなられた年の秋、その大臣のお邸の近所をぶらぶら

した時、もみじがまだそれほど色づいていなかったのを見て、お邸の人に

詠んで贈った歌

近院右大臣

848 うちつけにさびしくもあるかもみぢ葉もぬしなき宿は色なかりけり

（ご主人が亡くなったお宅は急に寂しくなりましたね。皆さんが喪服を着ておられるのは当然ですが、もみじまでがきれいな色になるのを遠慮しておりますね）

河原左大臣源融が亡くなられたのちに、そのお邸に行っておりました時に、

陸奥の塩釜の浦という所の風景をまねて作った庭を見て詠んだ歌 紀貫之

852 君まさで煙絶えにし塩釜のうらさびしくも見えわたるかな

（ご主人が亡くなられてからは塩焼く煙も消えてしまった塩釜の浦ではあるが、まさに文字どおり、あたり一帯がうら寂しく見渡されることである）

このうち源宗于の歌はその後の歌壇に大きな影響を与え、「山里」と「さびしさ」との結びつきはその後しばしば詠われるようになる。

寂しさに煙をだにも断たじとて柴折りくぶる冬の山里 和泉式部

（あまりの寂しさにせめて煙だけでも絶やすまいと思つて柴を折りくぶることだ、この冬の山里では）

さらぬだに夕べさびしき山里の霧のまがきに牡鹿鳴くなり

（そうでなくてさえ夕暮のさびしい山里の霧がまがきのように立ちこめている中に、妻を探し求めて牡鹿の悲しげに鳴いているのが聞こえてくるよ） 待賢門院堀河

また俊成は「源氏読まぬ歌詠みは遺恨なり」という。『源氏物語』は平安貴族が最も華やかであった藤原摂関政治の宮廷文化を彷彿とさせる物語である。『源氏物語』⁽¹⁾には「さびし」という用例が数十例ある。その中から最初の部分の用例を引用してみよう。

「筍木」

雨夜の宿直で光源氏と頭中将を囲んでの女性論の中で左馬頭が中流の女のおもしろさを語る。

○そうやって暮らしているとも誰にも知られず、葎^{むくろ}の茂る寂しい荒れ崩れた家の中に（さびしくあばれたらむ葎の門に）、思いもかけずかわいい様子の人が引き籠^{こも}っているような場合には、それこそこのうえなく珍しく感じるでしょう。 1—136

中流の女に興味を持った光源氏はこの後、実際に夕顔の花の咲く宿の女と出会い、心を込めて愛するが、短い逢瀬の後に夕顔は亡くなってしまう。夕顔の面影を忘れかねた光源氏は琴だけを相手にする寂しい境涯の女に興味を持つ。

「末摘花」

○まったくひどく一面に荒れて寂しい所に（いといたう荒れわたりて、さびしき所に）、あれほどのご境遇の方が、昔ふうに窮屈なほどだいに育てておられたのだから、そのあとともないいまの有様で、姫君はどんなにか悲しいもの思いの限りを尽くしていらっしゃることであろう。 1—343

やっと思いを遂げた源氏は末摘花の鼻の先が少したれて赤く色づいているのに気がつきひどく興ざめな気持ちになる。

○やっこのことで夜が明けた気配なので、格子をご自分でお上げになり、前庭の植込みの雪をごらんになる。人の踏む分けた足跡もなく、遠くまで一面に荒れていて、ひどく、寂しい感じなので（はるばると荒れわたりて、いみじうさびしげなるに）、振り捨てて帰っていくのもかわいそうで、「あの風情のある空の景色もごらんなさい。いつまでもうちとけた気持になってくだらないのはわけがわかりません」と恨み言をおっしゃる。 1—366

しかしそれでも源氏は末摘花の暮らしを怠らず援助していく。

○お車を寄せた中門が、じつにひどくゆがんで倒れかかっており、荒れはてていることははっきりしていながらも、夜分のこと、目につかずにすんでいたことが多かったのだが、今朝は、胸もつまるほど寂しく荒れはてている所に（いとあはれにさびしく荒れまどへるに）、松の雪だけが暖かそうに降り積もっているのは、山里のような風情があつて、しみじみとした感慨が胸にしみて、あの連中が言つた佳人の住む茅屋ぼうおくというのはこのような所のことだったのだろうか、

なるほど気がかりな身の上のかわいらしい人をここに住まわせて、不安な思いで恋しがったりしたいものだ。 1—369

○三が日のころが過ぎて、今年は男踏歌があるはずだから、例によつて諸所方々で管弦をにぎやかにやっていらつしやるので、なんとなく騒がしいけれど、寂しい官邸がしみじみと思ひやられなさるので（淋しき所のあはれに思しやられるれば）、七日の日の節会が終わつて、夜になつて帝の御前からご退出なさつたが、御殿直所にそのまま泊まりになつたようにみせておいて、夜更けを待つて、お越しになつた。 1—376

『源氏物語』における「さびしい」は主人が居なくなつて宿が荒れ寂れたといった場合に用いられる場合が多い。

これらの例で分かるように『古今集』や『源氏物語』においては「さびしさ」は積極的な意味に用いられてはいない。俊成は『古今集』や『源氏物語』において「さびし」に注目したわけではない。

「さびしさ」に積極的な価値を見出し「さび系の美」を発見したのはやはり西行であろう。俊成における「さび」の積極的価値は西行の影響によると思われる。西行の次の一首は王朝的美意識である「もののおはれ」から中世的美意識である「さびしさ」への転換を促したともいえる歌である。

とう人も思い絶えたる山里のさびしさなくば住み憂からまし

（訪れる人もないと断念した山里であるが、このさびしさがなかったなら住み憂いことであらうものを）

家永三郎は『日本思想史における宗教的自然観の展開』⁽¹²⁾でこの歌を引用して次のように云う。

山里の寂しさのままに於てかへつて無上のよろこびであり、魂の救ひとなるといふ特殊の心境が開かれた。山里もここに至つて其精神的展開の極限に達し、限り無く深く澄み透つた世界となるのであった。

また安良岡康作『中世文学の探求』⁽¹³⁾では、この歌には「いわゆる価値の転換」があり、「中世的文学意志の高き発現」が見られるという。なぜ西行においてこのような「さびしさ」における価値の転換が生じたのであろうか。

四

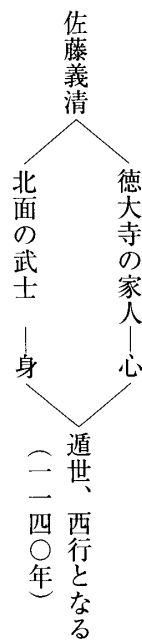
西行は清盛と同じ年の生まれであり、しかも同じ北面の武士であった。西行の先祖は、左大臣藤原魚名^{うおな}の五男で従四位下伊勢守にまでなった藤原藤成で、四代目に平将門の乱を平定した藤原秀郷がいる。それ以来、源平両氏に先んじて東国に勢力を張り、多くの鎮守府將軍を出した武勇の誉れの高い家系であり、奥州の藤原氏とも同族である。しかし前九年の役、後三年の役で源氏が東国で勢力を持つとともに東国を離れ、西行の曾祖父の頃から下級武官である左衛門尉として都で活躍するようになる。

出家前の西行は鎮守府將軍を多く出した武門の誉れ高い武者の末裔としての誇りに生きていた。鳥羽上皇の後・璋子の実家である徳大寺実能の家人として仕えながら、十八歳の時に鳥羽上皇発願の寺院に多額の寄付をして「兵衛尉」に任官し、特に選ばれて北面の武士として鳥羽院に勤務した。しかし朝廷は護るべき価値あるものではなくなっていた。独裁者であった白河法皇は徳大寺実能の娘を養女としながらも彼女が幼い内から関係を結び、その後孫の鳥羽天皇の妃とした後も関係を続けた。そのため鳥羽上皇はわが子・崇徳天皇が、白河法皇と璋子との間の子ではないかと疑って

いた。そのことを原因として白河法皇の死後、朝廷は崇徳天皇と鳥羽上皇の二つの勢力に分裂し、武士集団もそれぞれの立場・思惑から朝廷側や上皇側に味方した。その結果、崇徳天皇の母・璋子の実家である徳大寺の家人でもあり、鳥羽上皇の院を護る北面の武士でもあった西行自身の立場も、天皇方と上皇方に二つに分裂することになってしまった。

善し悪しを思い分くこそ苦しけれただあらるればあらける身に

一一四〇年、西行が二十三歳で突如として主家したのは、院政期の時代の混乱をわが心の分裂として受け止め、遁世することでこの混乱の外に生きる意味を見出そうとしたためであった、というのが謎に包まれている西行の出家の原因に対する私の考えである。『西行、そして風』⁽¹⁴⁾



次の二首の和歌は出家前後の歌は西行の不安な心をよく表現している。それになる心は春のかすみにて世にあらじとも思ひ立つかな

(空中分解していく心は春立つ霞のように立ちわたり、俗世にはあるまいと思ひ立ったことであるよ〔赤羽根訳〕)

鈴鹿山うき世をよそにふり捨てていかになりゆくわが身なるなむ

(憂き世を関係ないものとしてふり捨てて出家した自分は、今こうして鈴鹿山を越えてゆくが、今後どのようになりゆく身であろうか)



時代の混乱をわが心（崇徳天皇に同情し、璋子にたいして憧憬を感じていた？）とわが身（鳥羽上皇の院を守る北面の武士であった）の分裂として受け止めて出家した西行の歌には「身と心の分裂」をうたった歌が多い。

浮かれいつる心は身にもかなはねば如何になりともいかにかはせん

（自分の身からぬけ出てゆく心はわが身の自由にはならないので、どのようにしようとも、どうとも致し方のないことだなあ）

西行は他の多くの通世者と異なり出家後も時代と深く関わっていた。そこで西行の出家から平家一門が壇ノ浦で滅びるまでの間に於ける西行、平家一門、『千載集』の撰者・俊成、俊成の子で『新古今集』の撰者の中心であつた定家の年譜を見ておきたい。

一一四〇年

北面の武士・佐藤義清出家、西行となる。

惜しむとて惜しまれむべきこの世かは身を捨ててこそ身をも助けめ

俊成 さりともと思ふ心も虫の音も弱りはてぬる秋の暮かな

この歌は後に『覚一平家物語』では宗盛が九州で詠んだ歌とされる。

一一四二年

西行も俊成も待賢門院璋子の落飾結縁のために法華經二十八品歌を詠んでいる。谷山茂はこのことを契機として西行と俊成との親交が始まったと推測している。（『藤原俊成 人と作品』二九八頁）

一一四六年

西行が六条歌会で詠んだ歌のなかに「さびしさ」という言葉が見られる。

山家植草

かきこめし裾野の薄霜枯れし寂しさまさる柴の庵かな

この歌は古今集的、源氏物語的さびしさを超えたものではない。

待賢門院璋子は出家後二年半あまりで四十五歳で崩じた。この頃、西行は最初の陸奥の旅に出る。陸奥の旅で時代の分裂をわが心の分裂として深めていった。

陸奥の国にまかりたりけるに、野の中に常よりもおぼしき塚の見えけるを、人に問ひければ、中將の御墓と申すはこれがことなりと申しければ、中將とは誰がことぞと、また問ひければ、実方の御ことなりとぞ申しける、いと悲しかりけり。さらぬだに（実方の墓と聞かなくとも）ものあはれに覚えけるに、霜枯れ枯れの薄ほのほと見えわたりて、後に語らんも言葉なきやうにおぼえて

朽ちもせぬその名ばかりをとどめおきて枯野のすき形見にぞ見る

（陸奥に流され、ここで身は空しく朽ちてしまったが、歌人としての朽ちることのない名だけは留めおき、枯野の薄をその形見として見ることだよ）

十月十二日、平泉にまかり着きたりけるに、雪降り、嵐激しく、ことの外に荒れたりけり。いつしか（さつそく）衣河見まほしくて、まかりむかひて見けり。河の岸に着きて、衣河の城しまはしたる（城壁をめぐらしている）事柄、やう変りてものを見る心地しけり。汀凍りてとりわき冴えければ

とりわきて心もしみて冴えぞわたる衣河見に來たる今日しも

一一五〇年

俊成 夕されば野辺の秋風身にしみて鶉なくなり深草の里（久安百首）

一一五二年

西行、崇徳天皇の『詞花集』に「よみ人しらず」として一首入集

身を捨つる人はまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけれ

一一五六年 保元の乱

鳥羽上皇の後を継いだ後白河天皇と崇徳上皇の争いに摂関家の内紛が重なり、それに源氏と平家の武士が加担した保元の乱は、西行が通世してから十六年後の一一五六年に起こった。後白河天皇方に付いた清盛はこの乱に乗じて政治の表舞台に駆け上がり、西行は、破れて仁和寺に逃げ込んで出家した崇徳上皇のもとに駆けつけた。

世の中に大事出できて、新院あらぬさまにならせおはしまして、御髪おろして、仁和寺の北院におはしましてけるにまゐりて、兼賢阿闍梨出で会ひたり。月明かくて詠みける

かかる世に影も変らずむ月を見るわが身さへ恨めしきかな

(いたましくも新院が御出家になるようなこんな世の中が恨めしいばかりか、常に変わることのない光を放っている月が、そしてそれを見ているわが身までもが恨めしく思われるよ)

このうたを目崎徳衛は「西行の絶唱の一というべき」とする。

乱の十二日後に崇徳上皇は讃岐に流されることになった。天皇方の処断はまことに厳しく、源為義は子の義朝に、平忠正は甥の清盛に斬られ、乱後の後始末な貴族のそれではなく、まったく新しい時代、武士の時代が到来したことを示している。慈円が「保元以後の事はみな乱世」と嘆いたこともうべなるかなである。

一一五九年 平治の乱

清盛 保元の乱の戦功により播磨守となる。

一一六〇年

清盛 平治の乱の戦功により正三位となる。

一一六二年

定家生まれる。

一一六四年

崇徳院は讃岐に流され八年後、恨みをのんで崩御した。
俊成と平経盛との贈答歌

雪ふれば憂き身ぞいと思ひ知る踏みわけて訪ふ人しなければ
ふり果つる憂き身は雪ぞあはれなる今日しも人の訪ふにつけても

一一六七年

清盛 太政大臣となる

この年以前の作に西行が俊成と詠み交わした歌がある。

五条の三位入道、そのかみ大宮の家に生まれける折、寂念、西住などと罷りあひて、後世の物語申しけるついでに、「花に向ひて浄土に念ず」と申すこと詠みけるに

心をぞやがてはちすに咲かせつる今見る花の散るにたぐえて

一一六八年

西行(五一歳)は崇徳上皇の怨霊鎮魂のために讃岐に旅をした。この旅の目的や意義について知るには『平家物語』の異本といわれる『源平盛衰記』⁽¹⁵⁾によることが最適であろう。

讃岐の国へ入りて、松山の津といふ所に行きぬ。ここは新院流されて渡らせ給ひける所ぞかしと思ひ出だし、昔恋しく尋ねまゐらせけれども、その御あともなかりければ龍顔奉公の古へより、鵝王帰依の今までも、御事忝く哀れにおぼえければ、

松山の浪に流れて来し舟のやがてむなしくなりけるかな

と打詠めて、支度といふ山寺に遷らせ給ひても年久しくなりにければ、御跡なきも理におぼえて、「御墓はいづくぞ」と問ひければ、白峯といふ山寺と聞きて、尋ね参りたりけるに、あやしの下臈の墓よりもなほ草繁し。いかなる前世の御宿業にかと、いと悲し。昔は清涼・紫宸の玉台に、四海の主とかしづかれおはしましに、今は民村白屋の外土に、八重の葎に埋もれ給へる事、御心憂き事なれども、翠帳紅閨の中に三千の君と仰がれ、龍楼鳳闕の上に二八の主とあがめられて、弁才世に喧しく、威勢朝に振ひし人々も、名ばかり留まる世の習ひ、咸陽宮も徒らに片々たる煙と昇り、姑蘇台も空しく濃々たる露繁し。宮も藁屋も果しなき、とてもかくても世の中は、ただかげろふの仮の宿、住みはつまじき所なりとて西行、古詩を思ひ出でて、

松樹千年終に是朽ちぬ 槿花一日自ら栄を為す
と詠じつつ、暫くここに候ひけれども、法華三昧つとむる住持の僧もなく、焼香散華を奉る参詣の者もなかりけり。いと物さびしかりければ、

よしや君昔の玉の床とてもかからん後は何にかはせん
と読みけるは、かの延喜の聖主の

いふならく奈落の底に入りぬれば摂利も首陀もかはらざりけり
と申す御歌に思ひ合せて哀れなり。

さても七箇日逗留して、花を手向け香を焼き、読経念仏して「聖霊決定往生極楽」と回向し奉りて立ちけるが、御廟の傍らに松のありける本を削り、無からん時の形見にもとて、二首の歌をぞ書付けける。

久に経て我が後の世を問へよ松あとと忍ぶべき人もなき身ぞ

ここをまた我が住みうくてうかれなば松は独りにならんとやする
書き注してぞ出でにける。

これにや怨霊も慰め給ひけんとおぼつかなし

〔源平盛衰記〕 卷第八「讃岐院の事」

こうして西行は多年の願いであった、恨みをのんで死んだ崇徳院の鎮魂の目的を果たしたあと、弘法大師の遺跡を巡礼し、大師の誕生地・善通寺の近くに庵を結ぶ。この四国の旅について川田順は、「人間西行は此の行脚によって一段と深化し、同時に、必然の結果として歌人西行も一倍偉くなつた」と言い、三好英二は「人間性完成期に於ける西行の、更にそれをより深化せしめる一契機となった意味に於いて、彼の四国行脚は看過しがたい重要な意義を担ふものと考へたいのである」と述べているように、この旅が「西行の生涯にとつても重要な一線を画すべき旅」であったことは確かである。善通寺で詠んだ歌はそのことをよく示している。

住みけるままに、庵いとあはれにおぼえて

今よりは厭はし命あればこそかかる住ひのあはれをも知れ

ここに生きているからこそ「あはれ」を知ることができるという認識が生まれたのである。西行において「さびしさ」が否定されるべきものから「積極的に肯定すべきものになった前提として、四国における「生きているからこそあはれを知る」という感情・気分の発見があったと思われる。

『山家集』は一一七八年前後に編まれたといわれるが、「さびしい」の語を含んだ歌が二十首ある。この中、特に「さびしさ」が積極的価値を含んでいると思われる次の歌は四国の旅のあと一一七〇年までの間に読まれたのではないであろうか。

訪ふ人も思ひ絶えたる山里の寂しさなくば住み憂からまし

一一七〇年

俊成 住吉社歌合の判者になる。

一一七一年

清盛の娘・徳子、高倉天皇の妃となる。

一一七二年

西行 清盛が福原の邸でおこなった千僧供養・万燈会に出席（三月）。

一一七七年 鹿ヶ谷事件

一一七九年

平重盛没（七月）清盛、後白河法皇を幽閉（十一月）

一一八〇年

安徳天皇即位（四月）以仁王の乱（五月）

西行 宇治川の合戦を詠む。

宇治のいくさとかよ。馬筏とかやにて渡りたりけりと聞えしと思ひ出でられて

沈むなる死出の山がはみなぎりて馬筏もやかなはざるらむ（聞書

集）

福原遷都（六月）源頼朝挙兵（八月）義仲挙兵（九月）

頼朝追討の平家軍、富士川で水鳥の羽音に驚いて逃げ帰る（十月）

京都に還都、東大寺焼討ち（十二月）

西行 戦乱を詠む

世の中に武者おこりて、西東北南、いくさならぬところなし。打ち続き人の死ぬる数聞くおぼただし。まこととも覚えぬ程なり。こは何事の争ひぞや。あはれなることのさまかなと覚えて

死出の山越ゆる絶え間はあらかし なくなる人の数続きつつ

武者の限り群れて死出の山越ゆるむ。山賊と申すおそれはあらかしと、この世ならば頼もしくもや

一一八〇年

定家 晩年になって『明月記』の九月の日記に補入。

「世上の乱逆追討、耳に満つと雖も、之を注せず、紅旗征戎（戦い）は吾が事に非ず」

一一八一年

清盛 閏二月四日、没

一一八三年

二月、平資盛、俊成に『千載和歌集』撰集の後白河法皇の院宣を伝える。

四月、十万余騎の平家軍、義仲追討のため北陸道に発向

五月、平家軍、俱利伽羅峠、篠原の合戦で義仲に敗れる。

七月二十五日 平家一門、都落ち

義仲軍は都を眼下に見下ろす比叡山に迫った。平家は取るものも取りあえず安徳天皇を連れて都落ちして行った。

五

『平家物語』には多くの和歌が載せられているが、平家の平家となったのは都落ち以降であろう。都落ちの過程で平家はいかなる感情・気分を抱いた

のであろうか。そこにこの小論のテーマである「さびしさ」は見られるのであろうか。そこで都落ち以降の平家一門の歌を見ていこう。

○「忠度都落」

都落ちで最初に和歌が出てくるのは「忠度都落」である。「忠度都落」は一の谷合戦で平敦盛の首を討った熊谷次郎直実の話と共に『平家物語』で最もポピュラーな話である。『平家物語』における和歌の役割を知るために、最も読まれている「覚一本平家物語」と「延慶本」を比べてみたい。

『覚一本』

薩摩守忠度は、いづくよりやかへられたりけん、侍五騎、童一人、わが身共に七騎取ッて返し、五条の三位俊成卿の宿所におはして見給へば、門戸を閉ちて開かず。「忠度」と名のり給へば、「落人帰りきたり」とて、その内さわぎあへり。

薩摩守は馬から降り、自分自身で声高く言われるには、「特別のわけはありません。三位殿に申したいことがあって、忠度が帰って参っております。門をお開きにならないにしても、この近くまでお寄りください」と言われると、俊成卿は、「帰ってこられることもあるだろう。その人ならばさしつかえあるまい。お入れ申せ」といって、門を開けてお会いになる。様子はなんとなく哀れである。薩摩守が言われるには、「この何年もの間、歌のことについてお教えいただいて後、疎略にはお思いすることはありませんでしたが、この二、三年は京都の騒ぎ、国々の反乱など、すべて当平家の身の上のことです。歌道をなごりに考えていたではありませんけれど、変らずにお伺いすることもできませんでした。わが君（安徳天皇）はすでに都をお出になりました。一門の運命はもう尽きてしまいました。勅撰集の撰集があるだろうとのことを承りましたので、生涯の名誉に一首でもご恩

をこうむり、入れていただくこと存じておりましたのに、間もなく乱が起つて、その沙汰もなく中止になりましたこと、私にとって全く大きな嘆きと存じております。世が治まりましたならば、勅撰のご沙汰がございましょう。ここにあります巻物の中に適当なものがありませんらば、一首でもご恩をこうむり、入れていただき、草葉の陰でもうれしいと存じましたならば、遠いあの世から末長くあなたをお守りすることでしょう」といって、日頃詠んでおかれた多くの歌の中で、秀歌と思われるのを百余首書き集められた巻物を、いざ出発という時に、これを取って持たれていたが、それを鎧の合せ目から取り出して、俊成卿に差し上げた。三位はこれを開けて見て、「このような忘れ形見を頂きました上は、決していい加減には思いますまい。お疑いなさいますな。それにしてもただ今のお越しは、風情も非常に深く、しみじみとした思いも特に感ぜられて、感涙をおさえきれません」と言われると、薩摩守は喜んで、「今は西海の波の底に沈むのなら沈んでもよい、山野に屍をさらすのならさらしてもよい、この世に思い残すことはありません。それではお暇申して」といって、馬にうち乗り、甲の緒を締め、西に向って馬を進められる。三位は後ろ姿を遠くまで見送って立つておられると、忠度の声と思われて、「前途程遠し、思いを雁山の夕の雲に馳す」と声高らかに口ずさまれたので、俊成卿はますます名残惜しく思はれて、こみあげる涙をおさえて邸内に入られる。

その後、世が治まって、三位は千載集を撰ばれたが、忠度のあの時のありさま、言い残したことばを、今あらためて思い出して感慨が深かったのだ、あの巻物の中に、勅撰集に入れてもよさそうな歌はいくらもあったけれども、勸人の人なので、名字を公にされず、「故郷の花」という題で詠まれた歌一首だけを、「読人知らず」としてお入れに

なつた。

ささなみや志賀の都はあれにしを昔ながらの山桜かな

(志賀の旧都は荒れてしまったが、長等山(ながらやま)の山桜は昔のままだなあ)

その身が朝敵となつてしまつたからには、とやかく言えないことながら、悲しい残念なことであつた。(巻第七忠度都落)

『延慶本平家物語』

その中にやさしく哀なりしことは、薩摩守忠度は随分の好士なり。そのころ、皇太后宮大夫俊成卿、勅を奉て千載集撰はる事ありき。既に行幸の御共に打出られたりけるが、乗替一騎ばかり具て、四塚より帰て、かの俊成卿の五条京極の宿所の前に控へて門叩かせければ、内より「何なる人ぞ」と問ふ。「薩摩守忠度」と名乗ければ、「さては落人にこそ」と聞て、世の慎ましさに返事もせられず、門も開ざりければ、その時忠度、「別事にては候わず。この程百首をして候を、見参に入らずして、外土へ罷出む事の口惜さに、持て参て候。何かは苦しく候べき。立ながら見参し候ばや」と云ければ、三位哀れと思して、戦なく戦なく出合給へり。「世鎮まり候なば、定て勅撰の功終り候わむずらむ。身こそかかる有様に罷りなり候とも、亡からむ後までも、この道に名を懸けむ事、生前の面目たるべし。集撰集の中に、この巻物の内にさるべき句候はば、思めし出して、一首入られ候なむや。且は又念仏をも御訪候べし」とて、鎧の引合より百首の巻物を取り出して、門より内へ投入て、「忠度今は西海の浪にしづむとも、この世に思置事候わず。さらば入せ給へ」とて、涙をのこいて帰にけり。俊成卿感涙を押さへて内へ帰入て、燈の本にて彼巻物を見られければ、秀歌共の中に、「古京の花」といふ題を。

ささなみやしがのみやこはあれにしをむかしながらの山ざくらかな
「忍恋」に。

いかにせむみやぎはらにつむせりのねのみなけどもしる人のなき
その後いく程もなく世しづまりにけり。かの集を奏せられけるに、忠度この道に好て、道より帰りたりし志あさからず。但し勅勘の人の名を入る、事、はばかりある事なればとて、この二首を「よみ人知らず」とぞ入られける。さこそ変りゆく世にてあらめ、殿上人なむどの詠れたる歌を、「読人しらず」と入らけるこそ口惜けれ。

第三末「薩摩守道より返て俊成卿に相給事」

忠度が歌人としての名を残そうとしていることは両本とも共通している。延慶本は恐る恐る出てきた俊成に門の外から忠度が鎧の内から取り出した百首の巻物を門の中に投げ入れて、これで西海の底に沈むともこの世に思ひ残すことはないといつて立ち去つた。俊成は後に「読人知らず」として忠度の歌を入れたが、「故郷花」の歌以外に「忍恋」として「いかにせん御垣が原に摘む芹の根にのみ歎き知る人のなき」も撰入したとしている。(しかしこの歌は『千載集』には見られない)

「延慶本」は忠度の歌道執着の話として一貫している。しかし「覚一本」は俊成と忠度の交流を混入させ、忠度の歌を選入したのは忠度の「形見」であるとして、忠度の歌道執着を弱めてしまつてゐる。そして選入された歌も「故郷花」一首としてゐる。松尾葦江は「覚一本では、この歌が忠度と、平家一門に対する挽歌の役割をもはたしていると言ふことができる。」とする。また中村文『平家物語と和歌』は次のように言う。⁽¹⁸⁾

一首が平家に出自を持つ人物の作であることを念頭に置いて詠むならば、それはきらびやかな貴族的文化を創出しながら滅亡した平家一門

の運命の華やかさと寂寥に容易に一体化し、絢爛たる桜の花の映像と平家がたどった運命の哀切さとは相互に影響し合つて、双方が渾然となった「あはれ」の複雑な情調は増幅される。「さざなみや」の歌は、覚一本のような文脈に置かれることによって、実際の詠出時に意図された和歌世界が本来有してはいなかった、平家一門の運命すべてを覆い尽くして表象するかのような象徴性を獲得する。

『覚一本』が文学的完成度が高いといわれるゆえんである。しかし都落ちの過程での平家一門のなまの感情・気分になんとも近づきたいとするこの小論のテーマにおいては、このような作者による意図的な文学化は警戒しなければならない。というのも「さざなみや」の歌はこの時詠われた歌ではないし、また俊成がこの時、この巻物をみてこの歌を選んだわけではなく、この時の忠度はとにかく巻物は俊成に渡したという満足感があったであろうが、一首でも選んでもらえるかどうかという不安を抱いていたにちがいない。

『延慶本平家物語』で「忠度都落」に続いて乗せられている行盛の次の挿話は『覚一本』では、忠度の挿話を際立たせるために意図的に省かれている。

左馬守行盛も幼少よりこの道を好みて、京極中納言の宿所へ、行盛常におわしむつびて、偏にこの道をのみ嗜なみけり。定家卿そのころは少将にておわしけり。さるほどに一門都を落し時、日來のなごりを惜みて、何となく詠みをかけたりける歌どもを書集て、後の思出にもとや思われけむ、文をこまかに書いて、袖書にかうぞ（このように）書かれたりける。

流れての名だにもとまれ行く水の哀れはかなき身はきえぬとも

定家の少将この歌を見給て、感涙を流して、もし撰集あらば、必ず入むとぞおぼしける。父俊成卿、忠度の歌を「読人不知」と千載集に入られたりし事を、よに心うく念なき事に覺して、後堀川院の御時、新勅撰を撰ばれしとき、「朝敵三代こそ名をあらわすこと恐れ有りつれ。今は三代すぎ給ぬれば、何かはくるしかるべき」とて、「左馬守行盛」と名をあらわして、この歌を入れられたりしこそ、優しく哀れに覺へしか。

第三末「行盛の歌を定家卿新勅撰入事」

平経正もまた都落ちに際してかつて預かった琵琶を返しに仁和寺に駆けつけた。

○「経正都落」（巻第七）

修理大夫経盛の子息、皇后宮亮経正は、幼少の頃は仁和寺の御室の御所に、稚児姿で仕えておられたので、こんなあわただしさの中でも法親王にお別れを申そうとさつと思ひ出して、侍五、六騎を引き連れて、仁和寺殿へ駆けつけ、門前で馬から降り、申し入れられたことには、「二門の運も尽きて、今はもう都を出て参ります。この世に思ひ残すことといつては、ただ君のお名残だけでございます」……

経正其日は紫地の錦の直垂に、萌黄の匂の鎧着て、長覆輪の太刀をはき、切斑の矢負ひ、滋藤の弓わきにはさみ、甲をばぬぎ高紐にかけ、御前の御坪に畏る。……

こうして法親王と経正は歌を詠み交わしている。

あかずしてわかるる君が名残をばのちのかたみに包みてぞおく 御室
（飽かぬ別れをするあなたの形見として、これを大切に包んでおきます）

くれ竹のかけひの水はかはれどもなほすみあかぬみやのうちかな 経正

(この御所の中の呉竹の懸樋の水のながれるように、世は遷り変ったけれども、やはり以前に変らず住み飽きることのないこの宮の中だな)

あはれなり老木若木も山ざくらおくれさきだち花はのこらじ 法師

(老木も若木も山桜はあわれである。それらは早い遅いの違いはあっても花はみな散ってゆくであろう、あわれなことだ)

旅ころも夜なく袖をかたしきて思へばわれはとほくゆきなん 経正

(毎夜、旅装のままのひとり寝を繰り返しながら、私は遠くまで旅して行くであろう)

そうして巻いて持たせておられた赤旗を、さつと差し上げた。そこそこ控えてお待ち申していた侍どもが、「それ」といって駆け集まり、その軍勢百騎ほどで馬に鞭をあて足を速めて、間もなく行幸に追いつき申した。

『延慶本平家物語』では宮と経正以外に侍従律師行経の歌もある。

呉竹の元の笥ひは変らねど猶住飽ぬ宮のなか 経正

呉竹の元の笥ひは絶へ果て流るる水の末を知らばや 宮

飽ずして流るる袖の涙をば君が形に包みてぞ置 宮

皆散ぬ老木も小木の山桜ら遅れ先立花も残らじ 侍従律師行経

旅衣夜な夜な袖を片敷て思へば遠く我は行なむ 経正

また都落ちの一行に追いついたあと経正は次の歌を詠んでいる。

御幸なる末も都こと思へども猶を慰ぐさまぬ波の上かな 経正

○「一門都落」(巻第七)

都落ちの平家の一行七千余騎は山崎までやってくると石清水八幡宮を拝み、時忠が「我等都へ帰し入れさせ給へ」と祈り、教盛、経盛は歌を詠ん

だ。

はかなしなぬしは雲井にわかるれば跡は煙とたちのぼるかな 教盛

(はかないことであるよ。家の主人は雲の遥かかなたに都を離れてしまい、その跡は煙となって空に立ちのぼっている)

ふるさとをやけ野の原にかへりみてすゑも煙のなみちをぞゆく 経盛

(焼け野原になって煙る故郷を振り返って見て、これから先も煙の立つ波路を行く)

まことに故郷をば一片の煙塵に隔てつつ、前途万里の雲路におもむかれん、人々のこころのうち、おしはかられて哀れなり

一一八三年七月二十六日

○「福原落」

福原の旧都に着いた平家一行は『覚一本』では清盛の旧跡を偲ぶだけであるが、『延慶本平家物語』では清盛の墓所を詣で忠度が歌を詠んでいる。

「平家福原に一夜宿る事 付経盛事」

亡人に手向る花の下枝を手折ば袖の萎れけるかな 忠度

夜も明けたので福原の御所を初めてとして平家の邸宅に火をかけて焼き払い、福原を落ちて行く船の上で平家の公達が歌を詠んだ。

い、福原を落ちて行く船の上で平家の公達が歌を詠んだ。

はかなしやぬしは雲井と別るれど宿は煙と登りぬるかな 忠度

故郷を焼野の原に返見て末も煙りの波路をぞ行 行盛

漕出て浪と共に漂よへど寄べき浦の無ぞ悲しき 時忠

磯菜摘海人よ教へよ何処をか都の方に見るめ(海松布)とは云ふ 帥典侍

一一八三年八月十七日

○「名虎」(巻第八)

都では寿永二年八月十日、木曾義仲が朝日將軍という院宣を受け、十六日、朝廷は平家一門の百六十余人の官職をやめさせて殿上人としての名札を除いてしまった。八月十七日に太宰府に着いた平家は九州や壱岐・対馬二島の兵を召集したが集まって来なかった。平家は安樂寺（太宰府神社）に参詣して、歌を詠み、連歌をして神へ奉仕した。其の時、重衡は次のように詠んだ。

すみなれしふるき都の恋しさは神もむかしに思ひ知るらん

（住み馴れた古い都を恋しがる我々の気持は、神（菅原道真）も昔のご経験からよくおわかりでしょう）

人々は聞いて、みな涙をながされけり。

〔延慶本〕経盛作「神も昔を忘れ給わじ」『玉葉集』重衡作

○「緒環」おだまき（巻第八）

宇佐八幡宮に七日間参籠した宗盛に和歌による夢のお告げがあった。

世のなかのうさには神もなきものを何祈らむ心づくしに

（世の中のつらいことには神は何の助けもできないが、そのように心をこめて何をいつているのか）

大臣殿うちおどろき、胸うちさわざ、

さりともと思ふ心もむしの音もよわりはてぬる秋のくれかな

（今はこうであてもそのうちにはと思ふ心も虫の声も、全く弱ってしまった秋の暮れであるな）

といふふる歌をぞ、心ほしげに口ずさみ給ひける。さて（そうして）太宰府へ還幸なる。

この古歌とは『千載集』秋下にある保証（一一三五―四十二）の頃の藤原俊成の歌であり平家一門と俊成との交流が偲ばれる。ただしこの歌

は『延慶本』にはない。

一一八三年九月十三日

そのうちに、九月も十日過ぎになってしまった。萩の葉をなびかせる夕方の強い風、ひとり、着の身着のままで寝る床の上、妻と別れてひとり寝る袖も涙に濡れ、更けゆく秋の哀れさはどこも同じとはいっても、旅の空では特に忍びがたいことである。九月十三夜は名月の名のある月だけれども、その夜は都を思い出す涙で、自分から曇って、明るく見えない。宮中であって、月を見て歌を詠み思いを述べたことなども、今のように思われて、薩摩守忠度は、
月を見しこそこのよいの友のみや都にわれを思ひいづらむ

（月を見た去年の今夜の仲間だけが、都で自分のことを今思い出しているであろう）

修理大夫経盛、

恋しとよこそこのよひの夜もすがらちぎりし人のおもひ出られて

（恋しいことであるよ。去年の今夜に一晚中契り合った人が思い出されて）

皇后宮亮経正

わけてこし野辺の露ともきえずして思はぬ里の月をみるかな

（踏み分けて来た野辺の露としても消えないで、思いもかけぬ里に月を見ることだなあ）

○寿永元年（一一八二）に成立した『月詣和歌集』に経正作としてある歌で、この時の作ではない。

『延慶本』

さるほどに九月中旬にも成りにけり。深行く秋の哀れは何にもいいながら、旅の空は忍びがたきに、海辺の旅泊珍しくぞ覚ける。海人の苦屋に立つ煙、雲居に昇る面影、朝間の風も身に染むに、葦間を別て伝ふ船、弱り行く虫の声、吹きしほる嵐の音、物に触れ折に随ひ、藻

に住む虫の心地して、我から音をぞ泣かれける。十三夜は名を得る月なれども、殊に今宵はさやけて、都の恋しさもあながちなりければ、各一所に指つどひて詠じ給ける中に、薩摩守かくぞ詠じける。

月を見し去年の今宵の伴（友）のみや都に我を思出らむ
修理大夫経盛これを聞給て。

恋しとよ去年の今宵のよもすがら月見し友の思出られて

平大納言時忠卿。

君住めばこれも雲居の月なれど猶恋きは都なりけり

左馬頭行盛。

名にし負ふ秋の半ばも過ぬべし何時より露の霜に替らむ

大臣殿。

打解けて寝られざりけり梶枕今宵ぞ月の行へ見むとて

第四「尾形三郎平家於九国中ヲ追出事」

一一八三年十月（巻第八）

○「太宰府落」

この後、平家は筑紫に都を定め内裏を造ろうするが、かつて重盛の御家人であった維義が「昔は昔、今は今」と三万騎の軍勢で攻め寄せようとした。そこで平家は取るものも取りあえず太宰府から逃げ出さざるをえなくなった。『覚一本』には「太宰府落」に際しての歌はないが『延慶本』は十三夜の月見に続けて次のようになっている。

かくていささか慰さむ心地せられける程に、また緒方三郎十万余騎にて寄すると聞へければ、山賀城をも、取る物も取あはず、高瀬船に棹して、終夜豊前国柳と云所へぞ落給にける。河辺の叢に虫の声々弱りけるを聞給て、大臣殿かくぞ思つづけ給ける。

さりとともと思ふ心も虫の音も弱り果ぬる秋の夕暮れ
かの所は、地形眺望少し故ある所也。揚梅桃李引殖て、九重の景氣思出られければ、是にはさてもなむぞと思合給ける。さて薩摩守忠度なにとなく口づさみに。

都なる九重のうち恋くは柳の御所を春寄りて見

「さりととも」は『覚一本』では宇佐八幡宮での歌である。

太宰府を終われた平家は前途を悲観した清経の入水など悲しみと不安の日々であったが、四国の八島に着いた平家は、能登守教経の活躍もあって閏十月一日、水嶋の合戦で源氏を破り、その後、福原にまで攻め上り、一の谷に城郭を構える。

義経軍は宇治川の合戦で義仲軍を破り入京、義仲は二十一日に敗死する。西行は次のように詠む。

木曾と申す武者死に侍りけりな

木曾人は海のいかりを沈めかね死出の山にも入りにけるかな

一一八四年二月四日

○「三草勢揃」

こうするうちに寿永三年がやってきた。二月四日の清盛の命日には形通りの仏事が行われ、門脇中納言（教盛）が正二位大納言に任ぜられるということを、大臣殿から言われたので、教盛は次の歌を詠んで辞退した。

けふまでもあればあるかのわが身かは夢のうちににもゆめをみるかな

（今日までも無事でいられるわが身ではなかったはずである。官位の昇進も夢の中で夢を見るような空しいことである）

また都落ちに同行している時子の甥で清盛の養子となっている二位僧全真に、長年同じ寺に住んでいた法親王から「旅の空の様子を遥かに思い

やるにつけてもつらい思いがする。都もまだしずまっではいけない」などと書いた手紙に一首の歌があった。

人知れずそなたをしのぶころをばかたぶく月にたぐへてぞやる

『延慶本』ではあればあるやと思ふらむ

『新古今集』の詞書には「前僧都全真、西国の方に侍りけるに、遣はしける」とある。

一一八三年二月七日

一ノ谷合戦

○「忠度最期」

都まであと一歩である福原まで攻め上った平家であったが、三草合戦で義経の夜襲に敗れた平家は一の谷を固めるが義経の鶴越からの奇襲で大混乱に陥ってしまった。ここで多くの平家の公達が討たれてしまう。薩摩守忠度「熊野育ち大力のはやわざ」であったが落ちていく途中で首を討たれてしまった。「立派な大將軍を討ったと思ったけれども、名は誰ともわからなかったが、簾に結び付けられた文を解いて見ると、「旅宿花」という題で、一首の歌が詠まれていた。」

ゆきくれて木の下かげを宿とせば花や今宵の主ならまし

（旅の途中で日が暮れて桜の木の下陰に宿るならば、桜の花が今夜の主（亭主）となり、もてなしてくれるであろうか）

と書いていられたので、薩摩守とはわかったのであった。太刀の先に首を貫き、高く差し上げ。大声をあげて、「この日頃、平家の方で有名なでいられた薩摩守殿を、岡部六郎太忠純がお討ち申したぞ」と名のつたので、敵も味方もこれを聞いて、「ああ気の毒に、武芸にも歌道にも熟達していられた人なのに。惜しい大將軍だったのに」といって、涙

を流し、袖を濡らさぬ者はなかった。

『延慶本』では忠度の歌はない。

○「落足」

一の谷では敦盛、経正、通盛、知盛の息子の知章も討たれ、重衡は捕らわれてしまう。

合戦に敗れたので、天皇をはじめ奉って、人々はみな御船に乗られて海上にお出になるが、その心のうちはまことに悲しかった（心のうちこそ悲しけれ）。潮に引かれ、風のまにまに紀州路へ赴く船もある。芦屋の沖に漕ぎ出して、波に揺られている船もある。あるいは須磨から明石づたいに、宿泊地も定まらぬ楫を枕の船旅を続け、一人寝の袖も涙に濡れて、おぼろにかすむ春の月を眺めて、悲しみ嘆かぬ人はない（心をくだかぬ人ぞなき）。あるいは或は淡路の瀬戸を漕ぎとほり、絵島が磯に漂うと、波間をかすかに鳴き渡り、友にはぐれた小夜千鳥を見ては、これも自分の同類だなどと思う。行く先をどこともまだ考えを定めていないのかと見えて、一谷の沖でさまよっている船もある。このように風に任せ、波に従って、浦々島々に漂っているの、互いに生死もわからない。国を支配すること十、四国、軍勢の付くことも十万騎、都に近づくこともわずかに一日の道のりなので、今度はいくらなんでもと頼もしく思っておられたのに、一谷も源氏に攻略されて、人々はみな心細くなられた。

この後、夫・通盛を一の谷で亡くした小宰相は八島に渡って行く船の中から身を投げてしまう。

一一八四年二月十三日

○「首渡」

一の谷で討ち取られた平家の首は都で晒される。維盛は都の妻子が自分も死んだものと思つて心配しているに違いないと、無事を知らせる手紙を書いて和歌を添えた。

いづくともしらぬあふせのもしほ草かきおくあとをかたみとも見よ

(いづくで逢う機会があるともわからない海に漂う海草——藻塩草——のような私が、書き残しておくこの手紙の筆跡を記念とも思つて見てください)

『延慶本』「いづくとも知らぬ渚の藻塩草」

一一八四年二月十四日

○「内裏女房」

捕らえられた重衡は京中を引き回される。かつての重衡の愛人・内裏女房と歌を読み交わす。

重衡から内裏女房へ

涙河うき名をながす身なりともいまたびのあふせともがな

(悲しみの涙が流れて、よくない評判をたてる悲しい身となったが、そうなくても今一度逢う機会があればと願っていることだ)

女房から重衡へ

君ゆゑにわれもうき名をながすともそのみくづともになりなむ

(あなたのために私もよくない評判をたてられても、あなたと一緒に死にましよう)

『延慶本』「共にならばや」

重衡から女房へ

逢ふことも露の命ももろともにこよひばかりやかぎりなるらむ

(また逢うことも、はかない私の命も、両方とも今晚だけが最後でしょう)

かぎりとして立ちわかるれば露の身の君よりさきにきえぬべきかな

(これが最後と、別れて行くこうとすると、露のようににはかない私の身が、あなたよりも先に消えてしまひそうです)

一一八四年三月十日

重衡の身を引き渡すようにという頼朝の命令で重衡は梶原景時に連れられて鎌倉へ下る。途中、宿の長者の娘と歌を読み交わす。

○「海道下」

その宿の長者の娘である侍従という遊君から重衡へ

旅の空はにふの小屋のいぶせさにふる郷いかにこひしかるらむ

(旅をして、粗末な小屋がむさくるしいにつけて、どんなに故郷……京都……が恋しいことでしょう)

『延慶本』「東路や」

重衡から侍従へ

故郷もこひしくもなしたびのそらみやこもつひのすみ家ならねば

(旅に出てこんな小屋み寝ても、故郷の都も恋しくない。都も最後まで落着いて住める所ではないのだから)

甲斐の白根山を見て

惜しからぬ命なれども今日までぞつれなきかひのしらねをもみつ

(死んでも惜しくない命だが今日まで生き続けた、そのかいあって、甲斐の白根山も見る事ができた)

『延慶本』にはこの歌はない。この辺り『海道記』とほぼ同文

一一八四年八月十五日

○一二四〇年頃「原平家」が成立した後の一三二二年に出た『玉葉集』巻十七・雑四に都落ちした平家一門が、身内が殺されたり入水した後の哀悼

歌がある

元暦元年（寿永三年 一一八四年）、世間の戦乱が激しくなりました頃、平行盛が備前に道の守りを固めるといつて、壇浦という所におりました折に、八月十五夜、月が大変明るいつけても、昨年までは一門の歌人、経正・忠度朝臣などが一しょにいましたのに、（みな戦死してしまつて）どんなにか心細く悲しいことだろうと思ひやられて、その旨を言い送るといつて詠みました歌。

全性法師

ひとりのみ波まにやどる月をみてむかしの友や面かけにたつ

（あなたはただ一人で、この十五夜、波の間に映る月を見て、さぞや昔の友が、月光の中に幻に浮ぶように思つておられることでしょう）

返し

平行盛

もろともにみし世の人は波のうへにおもかげうかぶ月ぞかなしき

（一しょにこの月を眺めた、あの当時の人達は皆死んでしまつて、波の上にその面影が浮んで見えるような今夜の月の、何と悲しいことでしょう）

兄弟（通盛・業盛）に一度に死なれて嘆いておりましたのに、平行盛がいつもでも弔問しませんでしたので、言つてやりました歌。

法印忠快

うき身をばこととはずともかかる世のかなしきことはしるやしらずや

（この不運な私の身を弔問して下さらないのは仕方もない事ですが、このような世の中の悲しい事を、あなたは知つておられるのですか、おられないのですか。）

返し

平行盛

かなしさやよそのなげきとおもわねば人とふべき心ちだにせず

（この悲しさを、他人の嘆きとは到底思えません、自分自身の事としますので、事新しくあなたを弔問する気にもなれませんのです）

都に住んでいられず放浪した後、愛しあつた女の所から、前右近中将維盛がなつくなつた事を聞き伝えて、悲しさも一層その度合が加わるように言つてよこしました返事に詠みました歌。

前右近中将資盛

あるほどがあるにもあらぬうちに猶かくうきことをみるぞ悲しき

（生きている事が、生きている事にもならぬような悲痛な運命の中で、なおも又こんな情けない事を見るのが、本当に悲しい事です）

一一八四年秋

○「藤戸」

さる程に、萩の上風もやうやう身にしみ、萩の下露もいよいよしげく、うらむる虫の声声（恨むように哀れな虫の声）に、稲葉うちそよぎ、木の葉かつ（二方では）散るけしき、物思はざらむだにも（物思いのない者にさえも）、ふけゆく秋の旅の空はかんしかるべし。まして平家の人々の心の中、さこそはおはしけめと（さぞかし悲しくいらつしやつたろうと）、おしかかられて哀れなり。むかしは九重の雲の上（宮中）にて、春の花をもてあそび、今は八島の浦にして、秋の月になしむ。凡そさやけき月を詠じて、都の今宵いかなるらむと思ひやり、心をすまし、涙をながしてぞ、あかしくらし給ひかる。左馬頭行盛かうぞ思ひつづけ給ふ（次のように思ひ続け歌を詠まれた）

君すめばこれも雲井の月なれどなほこひしきはみやこなりけり

（君が住んでおられるのだから、これも雲の上の月だが、それでもやつぱり恋しいのは都なのであった）

『玉葉集』成立の直後に出た非難の書「歌苑連署事書」には「哀傷の所は盲目法師が語る平家の物語にてぞある」と記されている。

『延慶本』には「平家屋嶋に落留る事」に新中納言の歌がある。

住馴れし都の方は余所ながら袖に波越す磯の松風

一一八五年

平家 勝浦・志度合戦で源義経に破れる

一一八五年

三月二四日、壇ノ浦合戦

『平家物語を哲学する』で念仏の声が聞こえないといったが、この最後の決戦でも歌が詠まれていない。但し『延慶本』では二位の尼が海に沈む時詠んだ歌がある。

今ぞ知る御裳濯川の流には浪の下にも都ありとは

四月十四日「内侍所都入」

帥典侍

ながむればぬるたもとにやどりけり月よ雲井のものがたりせよ

(月を眺め物思いにふけると、涙で濡れる袂に月の光が映るのであった。月よ、大空…宮中…の物語をせよ)

頼政の子・仲綱の歌 392

雲のうへに見しにかはらぬ月かげのすむにつけてもものぞかなしき
(かつて宮中で見たのと変らない月影が、以前と同じように澄んでいるのを見るにつけても物悲しい)

大納言佐

我身こそあかしの浦にたびねせめおなじ浪にもやどる月かな

(私の身は今日明石の浦に旅寝することだろうが、月も同じこの浦の波に宿ることだな)

「さこそ (さぞかし) 物悲しうもおはしけめ」と、判官もののふなれどもなさけある男なれば、身にしみてあはれにぞ思はれる。

『金葉集』に春宮大夫公実「我こそはあかしのせとに旅寝せめ同じ水にも宿る月かな」とある。 392

五月一日

○「女院出家」

東山の麓、吉田の辺に隠棲した建礼門院は一一八五年五月一日に出家した。深い悲しみの中で、橘の花の香に古歌を思い出して次のように書いた。

ほととぎす花たちばなの香をとめてなくはむかしのひとや恋しき

(ほととぎすよ、お前が橘の花の香を求めて鳴くのは、昔したしかった人が恋しいのか)

「和漢朗詠集」「新古今集」などに見える。

『延慶本』には別に次の二首もある。

歎き来し道の露にもまさりけり故郷恋ふる袖の涙は

谷深き庵は人目ばかりにてげには心の澄まぬなりけり

一一八五年五月七日

○「腰越」

さて大臣殿(宗盛)は九郎大夫判官義経に連れられて、七日の明け方粟田口をお過ぎになると、皇居のある大内山も空のあなたに隔たってしまった。逢坂山で関の清水を御覧になって、泣く泣く次のように歌を詠まれた。

都をばけふをかぎりのせきみずにまたあふさかのかげやうつさむ

(都を今日を最後と出て逢坂の関にかかったが、関の清水をまた見ることができ、その水に再び私の姿を映すことがあろうか、そのようになりたいものだ)

一一八五年六月

宗盛親子、近江国で処刑、重衡、奈良で処刑

○「重衡斬られ」

重衡から大納言佐へ

せきかねて涙のかかるからごろも後の形見にぬぎぞかへぬる

(涙をとめかねて涙が衣にかかるが、その衣を後までの形見として脱ぎ替えました)

『延慶本』にはない。

大納言佐から重衡へ

ぬぎかふるころもいまはなにかせんけふをかぎりの形見と思へば
(脱ぎ替えた衣も、今となつては何の役にも立ちません。この衣も今日が最後のあなたの形見と思いますと)

一一八五年九月

能登へ流されることになった時忠は妹の建礼門院に別れを告げるために吉田の里に行く。

○「平大納言流れ」
ながさ

大納言は泣く泣く歌を詠まれた。

かへりこむことはかた田にひくあみのめにもたまらぬわが涙かな

(帰って来ることはできないだろうが、その堅田の浦で御師が引く網の目にも水がたまらぬように、私の目からも、止めようもなく涙が流れるものだなあ)

「月詣和歌集」かへりこんどはかたたにおく網のめにたまらぬは
涙なりけり(恵円法師)

一一八五年十月十五日

○「大原入」

文治元年九月の末に大原の寂光院に移った建礼門院は十月十五日、庭に散り敷く檜の葉を踏みならして来る物音に、誰が着たのかと女房に見に行かせると、牡鹿が通るのであった。大納言佐は次のように答えた。

大納言佐

岩根ふみたれかはとはんらの葉のそよぐはしかのわたるなりけり

(この辺鄙な山間の岩を踏んで、誰が訪ねて来よう、檜の葉がかさこそと音を立てたのは、鹿が通るのだった)

女院は哀れに思いになり、窓の小障子にこの歌を書かれてお残し

になった。

『延慶本』は建礼門院の歌として次を挙げる。
里遠み誰が問来らむ檜の葉のそよぐは鹿の渡るなりけり
とおなた

一一八六年四月二十日?

○「大原御幸」

次の年の秋、後白河法皇が大原の奥に行幸になった。

池の岸の山吹が咲き乱れ、幾重にも重なる雲の絶え間から、鳴いて通る山郭公の声が聞こえるが、その一声も法皇の御幸を待ち顔に聞える。法皇はこれを御覧になって、次のようにお詠みになる。

池水にみぎわのさくら散りしきてなみの花こそさかりなりけれ

(池水の上に、汀の桜の花が一面に散り敷いて、波に浮ぶ花のほうが花盛りだ)

『千載集』「みやこにおはしましける時、鳥羽殿に渡らせ給ひけるころ池上花といへる心をよませ給うける院御製」

女院の庵室に入ると襖には、いろいろな仏經の重要な文句などを色紙に書いて、所々にはりつけておかれた。その中に女院の御製と思われる歌がある。

おもひきや深山のおくにすまひして雲の月をよそに見んとは

(このように深山の奥に住んで、宮中で眺めた月を、よそで、それもこんな宮中を離れた寂しい所で見ようとは、かつて思いもかけなかったことだ)

『延慶本』は建礼門院が屏風に書いた古歌とある。

○「女院死去」

法皇の一行が帰った後、建礼門院は寝所の襖に次のような歌を書いた。

このごろはいつならひてかわがこころ大宮人のこひしかるらん

(仏道に入つて後は昔の華やかな生活などは忘れていたのに、この頃は宮中の人たちが恋しく思われるが、これはいつ習いおぼえて恋しいのだろうか)

いにしへも夢になりにし事なれば柴のあみ戸もひさしからじな

(昔の栄華も夢になってしまったことだから、柴で編んだ戸の中のわびしい草庵生活も久しくはないだろうな)

『延慶本』にはこの二首はない。

御幸の供をした徳大寺実公は庵室の柱に次のような歌を書き付けた。

いにしへは月にたとへし君なれどそのひかりなき深山^{みやま}辺^への里

(昔宮中におられた時は月にたとえて仰いだ君：女院であるが、今大原の深い山辺の里ではその光もなく、わびしい生活をしておられる)

建礼門院は将来のことなどを思い続けて次のように詠んだ。

いざさらばなみだくらべん時鳥^{はとしとび}われもつき世にねをのみぞ鳴く

(時鳥よ、さあそれならば互いに涙を比べよう、私もお前と同様この憂き世に生きて、ないてばかりいるのだ)

『覚一本』はこの歌が『平家物語』全体の最後の歌であり、このあと、建礼門院の往生となる。『延慶本』はこの歌は建礼門院が後白河法皇と会った時の歌とされている。

こうして見ると『平家物語』の中に載せられている和歌の中に、「さびしい」という語を含んだ歌は一首もなかった。平家一門の歌人たちは「さびしさ」と向き合いそれを自覚化していったわけではないように思える。平家は動乱の渦中にあつたのであるから、それだけの心の余裕はなかったのである。平家一門が都落ち以降、滅亡の過程で抱いた感慨に「さびしさ」は含まれているであろうかというこの小論の作業仮説は歌に関しては成り立たないように思われる。

それでは次に『平家物語』の地の文に「さびしさ」を見てみたい。『平家

物語』の源流には「原平家物語」の存在が推定され、それは平家が一一八五年に滅んだあと五十五年ほど後の一二四〇年頃に書かれたと考えられる。

『延慶本平家物語』が「原平家」に一番近いといわれているが、『覚一本平家物語』も一三七一年に編纂されているが、そこに流れ込んだ「語り」からみれば『覚一本』がより原平家に近いとも考えられる。そこには「さびしい」は見られるであろうか。

六

『覚一本平家物語』における「さびしさ」

巻第四「厳島御幸」

高倉上皇が清盛に幽閉されている後白河法皇に逢いに鳥羽殿に行く。

門前で御車からお下りになり、門内へお入りになると、人も少なく木が茂つて薄暗く、ものさびしそうなお住いで、まずあわれに思ひになる(物さびしげなる御住ひ、まづあはれにぞおぼしめす)。春はもう暮れようとして、夏らしい木々の様子にもなった。梢の花の色があせて、宮廷の花の枝にいた鶯の声も衰えた。

巻第十「千手前」

頼朝が重衡の無精を慰めるために千手前をつかわす。

その日の夕方、雨が少し降って、何かにつけてものさびしい頃に(その夕雨すこしふって、よろづものさびしかりけるに)、例の女房が琵琶・琴を召使いに持たせて中將のもとに参った。狩野介が酒をお勧めする。

灌頂巻「女院出家」

平家の人々が、今はこれまでと海に沈んだありさま、先帝・二位殿の御面影など、いついつまでも忘れられぬことにお思ひになるにつけて、

露のようにほかない女院の御命が、なんで今まで生きながらえて、こんな悲しい目を見ることだろうと思ひ続けられて、御涙を止めることがおできにならない。五月の短い夜だが、その短い夜を明かしかねておられ、時たまうとうとなさることもないので、昔のことは夢にさえも御覧にならない。壁際に置いて室を照らす灯火の、明け方わずかの残る光も弱くかすかで、夜通し暗い窓を打つ雨の音が寂しく聞こえるのであった（夜もすがら窓うつ暗らき雨の音ぞさびしかりける）。

灌頂卷「大原入」

ある女房が参つて申すには、「大原山の奥、寂光院と申す所は静かでございますよ」と申したので、「山里は何かと寂しいことはあるそうだが、世間でいやなつらい思いをするよりは住みよいだろうよ（山里は物のさびしき事こそあるなれども、世のうきよりは住みよかんるものを）」といつて、お移りになることを思い立たれた。・・・

寂光院は岩に苔がむして物さびしい所だったので、いつまでも住んでいたとお思ひになる（岩に苔むしてさびたる所なりければ、住ままほしうぞおほしめす）。露の置いている庭に萩原は霜に枯れて、籬の辺の菊が枯れ枯れに色の変るのを御覧になつても、ご自身の身の上のようだと、思われたことであろう。

『延慶本 平家物語』における「さびしき」

第二本

「有王丸油黄嶋へ尋行事」 281

ものうき麻を折りて、さびしさをなぐさむ。

「師長尾張国へ被流給事付師長熱田に参給事」 313

さびしき梢なれども、そう花啄木は暗に玲瓏の響を送る。その時水の

底より青黒色の鬼神出現して、膝拍子を打て、御琵琶に付けて、美くしげなる声にて笙歌せり。

「法皇の御棲幽なる事」 326

鳥羽殿には月日の重なるにつけても御歎は怠たらず。法皇は城南の離宮に閉じられて、冬も半ば過ぬれば、射山の嵐声いとどはげしく、閑亭の月に影殊にさびしき御すまいなり。

第二中

「新院巖嶋へ御参詣の事」 340

鳥羽殿にては門より下て入らせ給。春景既に晩なむとして、夏木立にも成にけり。残花色衰て、宮鶯音老たり。故宮の物さびしき気色なれば、門を指入らせ給より、御涙ぞ進ける。

「実定卿待宵の小侍従にあう事」 418

古き都を来てみれば浅茅が原とぞなりにける
月の光も寂しくて秋風のみぞ身には染む

第三本

「南都の火災に依り朝拝行われざる事」 571

治承五年正月一日、……禁中の儀式物寂しく、朝儀も悉く廢れ、仏法王法共に尽きにけるかとぞ見えし。

第三末

「楊貴妃」

紫震殿もさびしく、政道の荒廢は一天下の歎なり。（下六頁）

第四

「伊栄の先祖の事」

随分秘藏の娘にて、後園に尋常に屋一字造て、わりなき様にしつらひて、この娘をすまはする程に、高も卑も男と云物をば通わさず、常

はさびしさをのみ思て明し晩す。(下二三〇)

第五末

「重衡卿関東へ下り給ふ事」

四宮川原に懸ては、ここは延喜の第四の宮、蟬丸と云し人、仲秋三五の晩、清明たりし月の夜、世中はとてもかくてもと眺つ、琵琶の三曲を弾かれして、博雅の三位と云し人、三年が程、雨の降る夜も、降らぬ夜も、風の吹く日も吹かぬ日も、夜な夜な歩を運つ、横笛にて終に秘曲を移しけむ、薬屋の床のさびしさを、思入てぞ通られける。(下三二三)

第五末

「惟盛の北方歎き給う事」

連理の枝はもし離るる事ありとも、我は彼よりほかにたのむところなく、比翼の鳥はおのづから遠ざかることありとも、我は彼よりほか、昵方もなし。東閣に嵐冷き曉には、涙を流して、一生の早く過む事を愁へ、西楼に月に閑なる夕には、肝碎して、百年の速に近付む事を悲しみ給しに、今かく聞なし給けむ心中、推量れて哀れなり。(下三五三)

「平家屋嶋に落留る事」

十月、また冬にもなりぬ。屋嶋には浦吹く風も烈しくて、磯越す浪も高ければ、兵の責め来ることもし。籬の中の庭の面、寒けき蘆の乾葉まで、冬のさびしき云い知らずぞ思はれける。新中納言かくぞ思ひつづけ給ひける。

住み馴れし都のかたは余所ながら袖に波越す磯の松風

(下三五八、九)

「建礼門院御出家事」

東閣に嵐さびしき暮には、涙を千行流して、一生の晩むる事を悲しみ、西楼に月静かなる曉は、肝を万端に碎き二世に空からん事を歎く。(下四二六)

「建礼門院御出家事」

五月の短夜なれども明しかねつつ、自ずから打ちまどろませたまふ御事もなければ、昔の事を夢にだにも御覽ぜず。耿耿たる残燈の壁に背ける影かすかに、蕭々たる暗き雨の窓を打つ音閑なり。上陽宮の上陽宮に閉じられたりけん寂しさも限りあれば、是には過ぎざりけんとぞ思しめし知らるる。(下四二九)

「経正の北方出家事付身投給事」

女院は「吉田にも仮に立入らせ給はむ」と思し召しけれども、五月もたち、六月半になりけり。今日まで永らえさせ給ふべくも思しめさざりしかども、御命は限りありければ、さびしく幽なる御有様にてぞ明しくらせ給ける。(下四五〇)

第六末

「建礼門院小原へ移給事」

さすがに世をば通させ給たりけれども、御命は捨がたき習にて、はかなき露の御身を草の庵にやど宿して、あけ明ぬ暮ぬと過させ給ければ、御耳に常に触けるは、賤男が斧の音、御目に遮る物としては、嵐に乱て、散る木ノ葉、梢まばらに成るままに、寂しさのみぞ増さりける。…里遠み誰が問い来らむ檜の葉のそよぐは鹿の渡るなりけり

(下四六六)

「法皇小原へ御幸なる事」

御物語もようやく過しかば、寂光院の入合の鐘、今日も晩ぬと打ち知

られ、夕陽西に傾て、夜も更ぬべかりしかば、法皇御余波は尽せず
思しめされけれども、御涙を押へて還御なにけり。露を置かねども袂
を濡し、時雨せねども打萎れ、泣々還御なりけり。来迎院の寂しさ、
瀬料里の細路忘れ難く、哀れに心細ぞ思しめしいでける。女院は庭上
まで出させましまして、遙に見送り奉らる。昔を思しめしいでける
御涙の色深くぞ見へさせ給ける。
(下五三二)

「さびしさ」の用例は『延慶本』が五箇所、『寛一本』が十六箇所である。

「さびしさ」に積極的価値を見出していると思われるものはない。

七

次に平家が滅んだ後、『新古今集』が成立するまで変遷をたどってみたい。

一一八六年

定家 見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮

西行、初秋の頃、東大寺大仏再興勸進のため伊勢より平泉に赴く。

一一八七年

西行の『御裳濯河歌合』に俊成判をする。

一一八八年

四月二十二日、『千載集』成る。

一一八九年

閏四月三十日、義経、衣川に死す。

八月、西行の『宮河歌合』に定家判をする。

一一九〇年

二月二十六日、西行（七三歳）没。

一一九八年

定家「春の夜の夢の浮橋とだえて峯に別るる横雲の空」

一一二〇〇年

定家「駒とめて袖うちらはらふかげもなし佐野のわたりの雪のゆふぐれ」

一一二〇一年

『新古今和歌集』撰進の院宣下り、定家もその撰者の一人となる。

一一二〇五年

『新古今和歌集』成立

こうして見てくると、都落ちの過程で詠まれたと推定される『平家物語』
の中の平家一門の歌も、平家が壇ノ浦で滅亡して、しばらく経って書かれ
た『平家物語』自体も「さびしさ」を自覚化している箇所は見られなかつ
た。親や子、兄弟、同胞が討たれた平家の公達に見られた気分は「悲しい」
という感情であり、『平家物語』の「哀れ」は、平家の没落に涙を流す作者
の感情であった。

「さびしさ」という感情は、動乱の主役ではなく、それをじっと人間の
うごくさまをじっとみている認識者の眼を必要としているのであろうか。
その意味で、平家が壇ノ浦で滅んだ次の年の一一八六年に藤原定家が詠
んだ歌は決定的な意味を持つ。

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮れ

「さびしさ」という感情は、初めから何もないときには生まれえない。桜咲
く春、モミジの散る秋の有情があつて、それが失われた今、喪失の感情の
中で、我が心の内面をじっと凝視している認識者のものであろう。——彼
の心の空間には「秋の夕暮れの中の、海辺の粗末な小屋」のような無情が
広がっている。

その次の年の一一八七年に西行の『御裳濯河歌合』につけた藤原俊成の評語のなかに「さびしさ」が見られる。俊成は次の年の一一八八年に『千載和歌集』を完成しているが、その中の歌に「さびしさ」を含んだ歌が八首ある。

さらに次の年の一一八九年、西行の『宮河歌合』に付けた定家の評語の中にも「さびしさ」が見られる。

定家は一二〇〇年には次の歌を詠んでいる。

駒とめて袖うちあらう蔭もなし佐野のわたりの雪の夕暮れ

一二〇一年、『新古今和歌集』撰進の院宣が下り、定家もその撰者の一人となり、やがてその中心となり、一二〇五年には『新古今和歌集』が成立するのである。その中に「さびしさ」を含んだ歌が二三首ある。

平家が滅んだ二十年の間に「さびしさ」が日本人の心にどっしりと腰をおろす素地が作られたと言えよう。

そうすると次のテーマは『新古今和歌集』における「さびしさ」の成立となるであろう。そのための資料として最後に①『山家集』の「さび」②『千載和歌集』の「さび」③『新古今和歌集』の「さび」を載せておきたい。

資料1

『山家集』の「さび」

157 花も散り人も都へ帰りなば山さびしくやならんとすらん

(山の桜も散り、花を見に来た人も都へ帰ったならば、山は再び寂しくなることであろう)

303 庵にもる月の影こそさびしけれ山田は引板の音ばかりして

(山里に独り住みのこの庵では、おとなうものは山田の引板の音ばかり、庵の隙間から洩れこんでくる月の光こそ、まことにさびしいことである。)

340 いづくとて哀れならずはなけれども荒れたる宿ぞ月はさびしき

(どこであろうと月があわれでない所はないが、荒れ果てた宿を照らす秋の月はことに寂しさのまさるものである。)

345 木の間洩る有明の月をながむれば寂しさそふる峯の松風

(木の間を洩れてくる有明の月の光をながめると、更に峯の松風が響いてきてさびしさを添えることだ。)

425 うづら鳴くをりにしなれば霧こめて哀れ寂しき深草の里

(鶉の鳴く頃ともなると、草深い深草の里に霧が一面にたちこめて、あわれにも寂しいことだ。)

505 かきこめし裾野の薄霜枯れて寂しさまさる柴の庵かな

(草庵をその茂みの中に閉じこめてしまった裾野の薄が、霧のために枯れてしまった。薄に閉じこめられていた時にもまして、柴の庵は一層寂しくなったなあ。)

508 霜かづく枯野の草の寂しきにいづくは人の心とむらん

(霜に覆われて枯れはてしまった野原の草の寂しさに、冬となった今は、どこに人は心をとどめるのであろうか。)

513 さびしさに耐へたる人のまたもあれな庵ならべん冬の山里

(この閑居の寂しさに堪えている人が他にもあつてほしいものだ。そうしたらこの冬の寂しい山里に庵を並べて住もうものを。)

514 霜にあひて色あうたむる葦の穂の寂しく見ゆる難波江の浦

(かつて春萌え出たあの若々しい緑の色から、秋を経、霜にあつて色をすっかりかえてしまった葦の穂の寂しく見える難波江の浦である。)

515 玉まきし垣根の真葛霜枯れて寂しく見ゆる冬の山里

(玉のように先端を巻いて茂っていた垣根の真葛が、霜にあつて枯れてしまい、人目も草もかれはて、まことに寂しく見える冬の山里であるよ。)

520 氷しく沼の葦原風さえて月も光ぞ寂しかりける

(氷が一面に張りつめている沼の葦原は、吹きわたる風も一段と冴えわたって、寂しさきわまりないが、風になびく葦、氷が冷たく輝く沼にかけを落としている月の光も寂しいことである。)

557 花も枯れ紅葉も散らぬ山里は寂しさをまた訪ふ人もな

(秋草の花も枯れ、紅葉も散り尽した山里は、花や紅葉が美しかった時と同じく、このさびしさをも訪れてくれる人のあつてほしいものだ。)

559 津の国の葦あしの丸屋まるやの寂しさは冬こそわけて訪ふべかりけれ

(摂津の国の葦葦あしの粗末な小屋の寂しさは、常のことではあるが、特に冬にこそ訪れ、その寂しさを味わうべきだ。)

563 山里はしぐれし頃の寂しさに風の音はややまさりけり

(山里では時雨の降る頃も大層寂しいが、風の吹く頃となると、その音によつて寂しさが更につのることである。)

566 山ごとに寂しからじとはげむべし煙けぶりこめたり小野の山里

(それぞれの山で、きつと寂しくなどないと思つて、格別炭焼きに精を出しているのであらう。炭を焼く煙がいつぱいたちこめているよ、ひっそりとしたここ小野の山里では。)

937 訪ふ人も思ひ絶えたる山里の寂しさをなくば住み憂からまし

(訪れる人もないと断念した山里であるが、このさびしさがなかつたら住み憂いことであらうものを。)

940 松風の音あはれなる山里に寂しさ添ふるひぐらしの声

(松風の音がしみじみとあわれな山里に、さびしさを添ふるひぐらしの声が聞こえるよ。)

944 水の音は寂しき庵いおの友なれや峯の風の絶え間絶え間に

(谷川の水の音は一人さびしく住む庵の友であるよ。峯を吹く風の絶え間絶え間に聞えて来て、心を慰めてくれることだ。)

977 雲取や志古しこの山路はさておきて小口おぐちが原の寂しからぬか

(霜取山の志古の山路がさびしいのは当然のこととしてさておいて、小口が原はさびしくないことがあろうか。)

1023 み熊野の浜木綿はまゆう生ふるうらさびて人なみなみに年ぞ重なる

(み熊野の浜木綿が生えている浦がさびしいように、自分の心中もさびしく、浜木綿の葉が重なるように自分も人並みに年だけは重なることだ。)

1090 松風はいつもときはに身にしめどわきて寂しき夕暮れの空

(松風の音は、松の緑が変わらぬようにいつ聞いても変わることなく身み沁みるものであるが、夕暮れの空に聞く音は格別寂しいことだ。)

あばれたる草の庵の寂しさは風よりほかに訪ふ人ぞなき

(荒れはてた草の庵の寂しさといったら、人は勿論のこと、風よりほかに訪れるものでもないよ。)

資料2

『千載和歌集』のさび

題しらず

延久第三親王輔仁

177 さみだれに思ひこそやれいにしへの草の庵いおりの夜半のさびしさ

(五月雨に思いやることだ。唐は白楽天の古の、草庵に過した夜半の寂寥を)

273 ときはなる青葉の山も秋くれば色こそかえねさびしかりけり

(常盤の青葉山も、秋がやってくると、まだ色こそ変わらぬものの、流石に寂寥の景色に変化することだ)

堀河院御時、百首歌たてまつりける時よめる

藤原仲実朝臣

303 山ざとはさびしかりけりがらしのふく夕ぐれのひぐらしの声

(山居とは寂しいものだ。木枯しの吹きすさぶこの夕暮れ、ひぐらしの声も耳に満ちるばかりだ)

法性寺入道前太政大臣、内大臣に侍ける時、

家歌合に、野ノ風といへる心をよめる

藤原時昌

305 露さむみうらがれもてく秋の野にさびしくもある風のおとかな

(露寒のために次第に末枯れてゆく秋の野に、何とも寂しい風の音がするよ)

承暦二年内裏歌合によめる

藤原正家朝臣

306 夕ぐれは小野の萩原ふくかぜにさびしくもあるか鹿のなくなる

(夕暮は何とまあ寂しいものか。小野の萩原を吹く風に誘われて鹿が鳴いていることだ)

堀川院御時、百首歌たてまつりける時よめる

二条太皇太后宮肥後

307 三室山みつむらやまおろすあらしのさびしきに妻よぶ鹿の声たぐふなり

(三室山を吹きおろす山風が寂しく感じられるのに、妻を恋いもとめる鹿の声が共に混って聞こえてくるよ)

311 百首歌たてまつりける時よめる 待賢門院堀川
さらぬだに夕べさびしき山ざとに霧のまがきにを鹿なくなり
(そうでなくてさえ寂しい夕暮の山荘、霧の立ちこめるその垣根の辺りに牡鹿が鳴くことだ)

323 さびしさをなにとへんを鹿なくみ山のさとのあけがたの空 惟宗広言
(さびしさは何にたとえよう。牡鹿の鳴くこの深山の里の明け方の空の情景よ)

326 題不知 よみ人知らず
おどろかす音こそ夜の小山田は人なきよりもさびしかりけれ
(夜の山田では、鹿おとしの引板の、目を覚まさせる音の響きこそが、人のいないよりかえって寂しく感じられるのであったよ)

340 松風の音だに秋はさびしきに衣うつなり玉川の里 源俊頼朝臣
(松風の音だけでさえ秋は寂しいのに、衣打つ音が聞こえるよ、この玉川の里では)

419 中納言定頼世をのがれてのち山里に侍けるころ、 中納言定頼むすめ
つかはしける
みやこだにさびしまさるがらしに峰の松風思ひこそやれ
(木枯しの音を聞いていると、都にいてさえ寂しさがまさりますのに、山里の峰の松風の音の心細さが思いやられてなりませんよ)

445 山家の雪の朝といへる心をよみ侍ける 大納言経信
朝戸あけて見るぞさびしき片岡の榎のひろ葉にふれるしらゆき
(朝戸を開けて見る、片岡の榎の広葉に降っている白雪は、なんとも寂しいものだよ。)

993 さびしさにあはれもいとどまさりけりひとりぞ月は見るべかりける 顕昭法師
(寂しさによってしみじみとした哀感も一層まさって感じられるよ。やはり一人だけで月は見るものであった。)

1008 閑居の月といへる心をよめる 藤原隆親
さびしさも月見るほどはなぐさみぬ入るのちを訪ふ人もがな
(寂寥感も、月を見ているうちは慰められた。その月が山の端に入ってしまった後、訪ねてくれる人がほしいものだ。)

僧都頼実まかりてのち又の年の春、禅定院の花盛りなる
を見てよみ侍ける

1054 宿もやど花もむかしに匂へども主なき色はさびしかりけり
(宿も昔のままの宿だし、花も昔のままに咲き華やいているけれども、主人のいない家の桜の色は寂しいことだ。)

1103 一品聡子内親王仁和寺に住み侍ける冬ごろ、寛の水を三 輔仁親王
つの御子のもとにおくられて侍りければ、つかはしける

1104 山里の寛の水の氷れるはおと聞くよりもさびしかりけり 聡子内親王
(山里の寛の水の氷っているのは、その水音を聞くよりも寂しいことですね。)

1138 山里のさびしき宿のすみかにも寛の水の解くるをぞ待つ 寂蓮法師
(水音を聞くのが寂しい山里の住居であっても、春到って寛の水の解けるのを待っているのです。)

『新古今集』のさび
さびしさに憂き世をかえて忍ばずはひとり聞くべき松の風かは
(寂しさど俗世に生きるつらさを引き換えに耐えていなかったら、独りで聞くことのできる松風の音でしょうか。絶えているからこそ独りで聞けるのです。)

資料3

『新古今集』のさび
閑中春雨といふことを 大僧正行慶
つくづくと春のながめの寂しきはしのぶにつたふ軒の玉水

64 春の長雨に、じつと見入ったものの思いをしながら、身にしみて寂しさを感じるのは、忍ぶ草につたわる軒の雨だれである

千五百番歌合に 前大納言忠良
夕づく日さすや庵の柴の戸に寂しくもあるかひぐらしの声

269 夕日のさす、閉ざした草庵の柴の戸に、寂しいことだ。ひぐらしの声は 寂蓮法師
題知らず

361 寂しさはその色としもなかりけり横立つ山の秋の夕暮れ
(この寂しさは、その色がそうだというのでないことだ。横の立っている山の秋の夕暮れよーながどうということもなく寂しい)

392 ながめつつ思ふも寂しひさかたの月の都の明け方の空 藤原家隆
(しみじみと見入りながら想像するのも寂しい。月の都の明けていく、明けがたの空よ)

395 八月十五夜、和歌所歌合に、深山の月といふことを 藤原良経
深からぬ外山とやまの庵の寢覚めだにさぞな木の間の月は寂しき

(深くない外山の庵の寢覚めでも、このようにまあ、木の間の月は寂しいものだ)

郁芳門院の前裁合によみ侍りける 藤原顕綱

450 ひとり寝やいとど寂しきさ牡鹿の朝臥す小野の葛の裏風

(独寝がいよいよ寂しいことか。牡鹿の、朝を迎えて寝ている野の、葛の葉を裏返して吹く風よ)

秋歌とて 後鳥羽院

492 寂しきは深山の秋の朝曇り霧にしおるる榎の下露

(寂しさを呼ぶのは、深山の秋の朝曇りに、霧で濡れてしつとりと枝を垂れている榎の下に露の落ちる眺めよ)

祝部成茂

565 冬の来て山もあらはに木の葉降り残る松さへ峰に寂しき

(冬が来て、山も地肌がはつきりと見えるまでに木の葉が散り、散らないで残っている松までも、峰に寂しく見えることだ)

題知らず 西行法師

627 寂しさにたへたる人のまたもあれな庵ならべん冬の山里

(わたしのように寂しさに耐えている人がほかにもいるといいなあ。いたら、その人と庵を並べて住もう。この冬の山里で)

藤原国房

670 野亭の雪をよみ侍りける 寂しさをいかにせよとて岡なかなる榎の葉しだり雪のふるらん

(寂しさを、このうえ、どうせよというので、岡のほとりに立っている榎の葉を垂れさせて、雪が降っているのであらうか)

家に百首歌よませ侍りけるに 藤原兼実

674 降る雪に焚く藻の煙かき絶えて寂しくもあるか塩竈の浦

(降る雪で、塩を取るいとなみの焼く藻の煙が絶えて、寂しいことだ。塩竈の浦は)

旅歌とてよめる 藤原定家

953 旅人の袖吹きかえす秋風に夕日寂しき山の掛橋

(旅人の袖を吹き返している秋風の中で、夕日が寂しくさしている山の掛橋よ)

1571 中納言顯長がもとに遣はしける 後徳大寺左大臣

夜半よわに吹く嵐につけて思ふかな都もかくや秋は寂しき
(夜半に吹く風につけて、思うことです。都も、このように秋は寂しいことであるかと)

注

- (1) 『平家物語』は特にことわりがない場合には「覚一本」を指す。現代語訳は小学館『日本古典文学全集』版による。
- (2) 『延慶本平家物語』北原保雄・小川栄一郎編、勉誠出版
- (3) 『湘南文学』第十六号 神奈川歯科大学、二〇〇三年
- (4) 『ハイデッガーと日本の隠者哲学』神奈川歯科大学「基礎科学論集」第十八号、二〇〇一年
- (5) 『古今和歌集』現代語訳は小学館『日本古典文学全集』
- (6) 日崎徳衛『西行の思想的探究』
- (7) 復本一郎『さび』はなわ新書、一九八三年
- (8) 久保田淳『日本人の美意識』
- (9) 谷山茂『平家歌人』『和歌文学の世界』笠間書店
- (10) 斎藤茂吉『さびし』の伝統 岩波書店
- (11) 『源氏物語』現代語訳は小学館『日本古典文学全集』
- (12) 家永三郎『日本思想史における宗教的自然観の展開』
- (13) 安良岡康作『中世文学の探求』
- (14) 赤羽根龍夫『西行、そして風が』『日本文学を哲学する』南窓社、一九九五年
- (15) 『源平盛衰記』水原一考定、新人物往来社
- (16) 川田順『西行』創文社、一九三九年
- (17) 三好英二『西行の四国行脚に就いて』『西行歌集』講談社、一九四八年
- (18) 松尾葦江『平家物語論究』
- (19) 中村文『平家物語と和歌』

(本学教授)